

683
123

683-123



1200501577889

安房先賢偉人略傳

安房先賢偉人傳記編纂

委員編

6
1

683

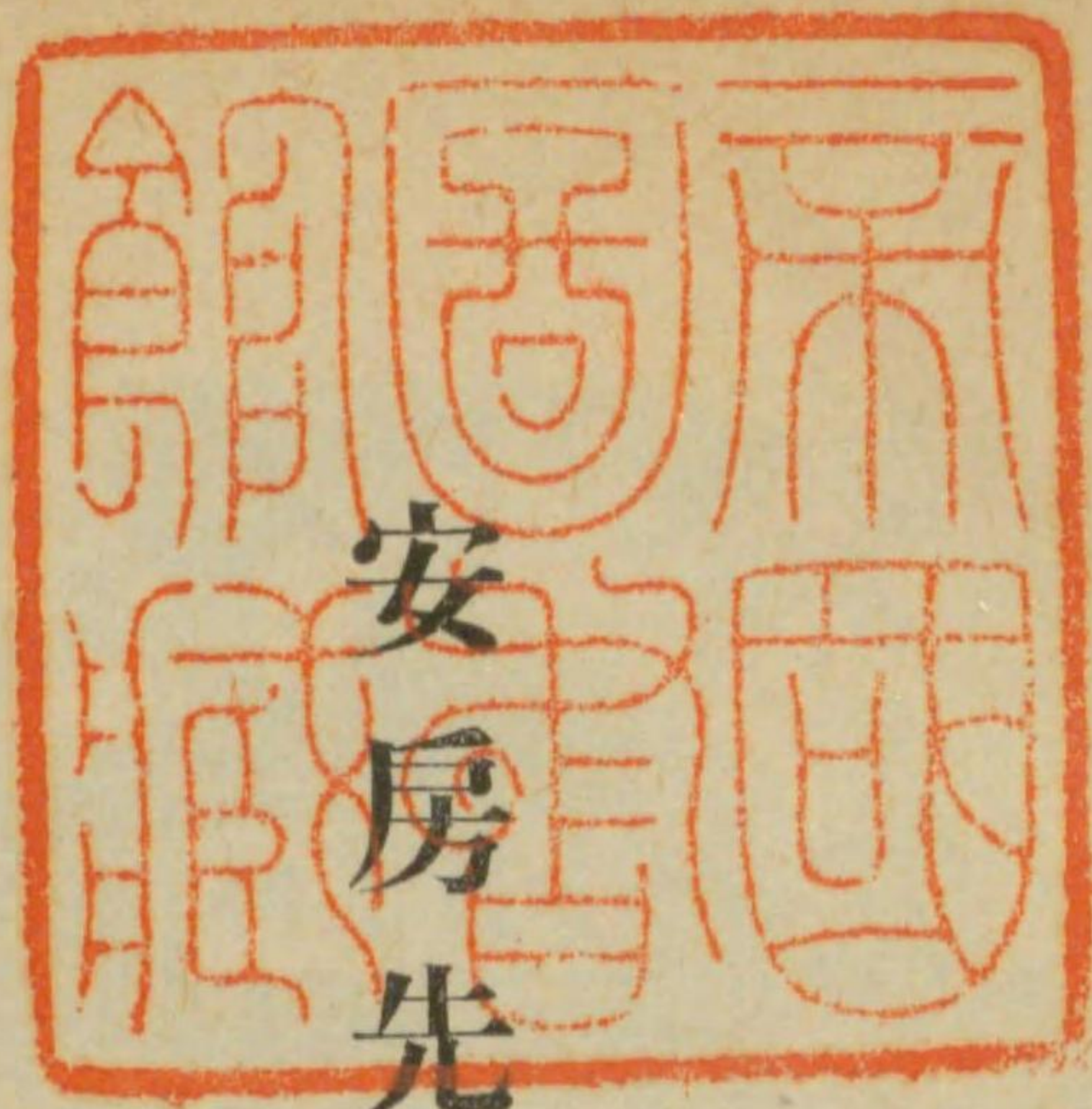
123

安房先賢偉人略傳



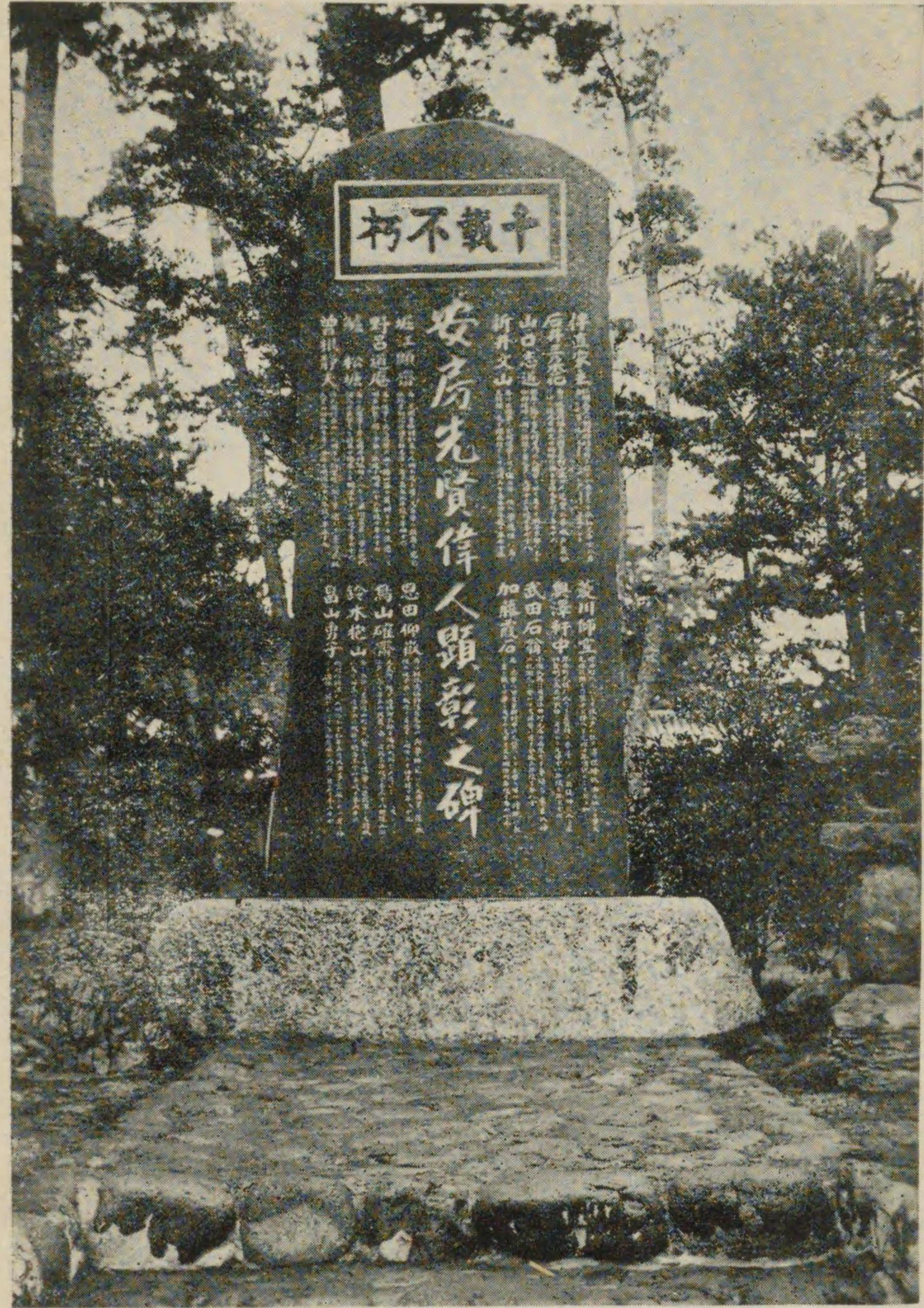
安房先賢偉人略傳





安房先賢偉人略傳





(東京海軍司令部乙第三二五號許可濟 被許可者 奥澤爾太郎)



683-123

例言

本書は、今回顕彰せられたる安房先賢偉人の略傳にして、其の参考に用ひたる資料の主要なるものは、凡そ左の如し。

安房志	安房郡誌	房總叢書	房總人名辭書
房總町村と人物	房總の偉人	大日本人名辭書	大日本地名辭書
武江年表	維新後大年表	武鑑(數種)	姓氏家系大辭典
讀史備要	續日本後紀纂詰	懽堂日歷	藩翰譜
事實文編	明治政史	大日本史	續徳川實記
日本醫學史	日本數學史	明治史要	日本教育史
上野國誌	日本傳説安房の卷	房總算學調査資料	房總里見氏の研究
儒林源流	漢學者傳記集成	高橋氏文考注	高倍神考
水戸學新研究	増補水戸の文籍	水藩修史事略	桃源遺事
水戸義公傳	傳記大日本史	水府系纂 未刊	鎌倉日記 未刊

耆舊得聞 未刊	史館先賢詩真蹟 未刊	文苑遺談 未刊	武左衛門口傳 <small>小説の挿繪から見た</small> 菱川師宣
菱川師宣畫譜	浮世繪	增補浮世繪類考	
文山詩集 未刊	吉田松陰全集	松陰遺著	吉田松陰
義所鳥山先生傳	宍陰存稿	鳥山家譜考 未刊	懷舊記事
梅田雲濱遺稿並傳	國華俱樂部	産科發明	養生新語
撥翳鍼訣	水穂傳	百首正解	火水與傳 未刊
神風伯 未刊	安房日記	杉庵志道遺稿	正卜考
掬靄山房詩 未刊	品石風雅	梁川星巖翁	浪淘集
枕山詩鈔	算法新書	下谷叢話	蓮祖舊跡志
佐殿草創記 未刊	孫子纂注 未刊	鷄肋雜誌 未刊	仰岳樓文鈔 未刊
仰岳樓得則錄 未刊	長尾藩史譚	松塘小稿	房山樓詩
房山樓集	房山樓遺集 未刊	超海集	芳雲遊稿
北遊存稿	七曲吟社閨媛絕句	透軒遺稿	抱山詩集 未刊
東海詩集 未刊	東海隨筆 未刊	畠山勇子傳	畠山勇子

此の他に、碑文、墓誌銘、鐘銘、製作品の刻銘、書畫等多數を参考す。

其の他各關係の家々に秘藏せられたる古文書、記録、系圖、過去帳、位牌等の類は、殆ど残す所なく参考に資したり。是等貴重資料を貸與せられ、或は閱覽を許されたる諸氏に對して、厚く感謝の意を表す。

一本書は、行文の煩冗を避けんがために、人物の稱謂に悉く尊稱を省略したり。頗る禮意を闕くものあり諒恕を請ふ。

一本書には、我安房郡内の町村名に限り、縣郡名を省略して、單に町村名のみを書したり。委しくは千葉縣安房郡何々町村と書くべきものなり。諒知を請ふ。

一本書は、略傳なるが上に、出版を急ぎたるため、甚だ不完全のものとなれり。詳細の事歴は、追て出版すべき本傳につきて見られんことを望む。

一事歴の調査につきては、文献の足らざる所は、關係家の諸君より、直接談話を拜聽し、或は文書を以て往復數回乃至十數回の示教を煩はしたり。茲に感謝の意を表す。

昭和十年十月

編纂委員

補訂

堀江顯齋傳の内、左の通り訂正増補す。

顯齋は、先代太左衛門の實子ではなく、東條村和泉小字根方の磯部氏から、養子に行つた人である。而して養父太左衛門は、文化十四年六月五日に二十四歳で歿した。その時顯齋は十三歳であつた。故に年齢の上から見て、顯齋の養子に行かれたのは、養父の歿後であつたと思はれる。詳細は追つて出版する詳傳について見られたい。

目次

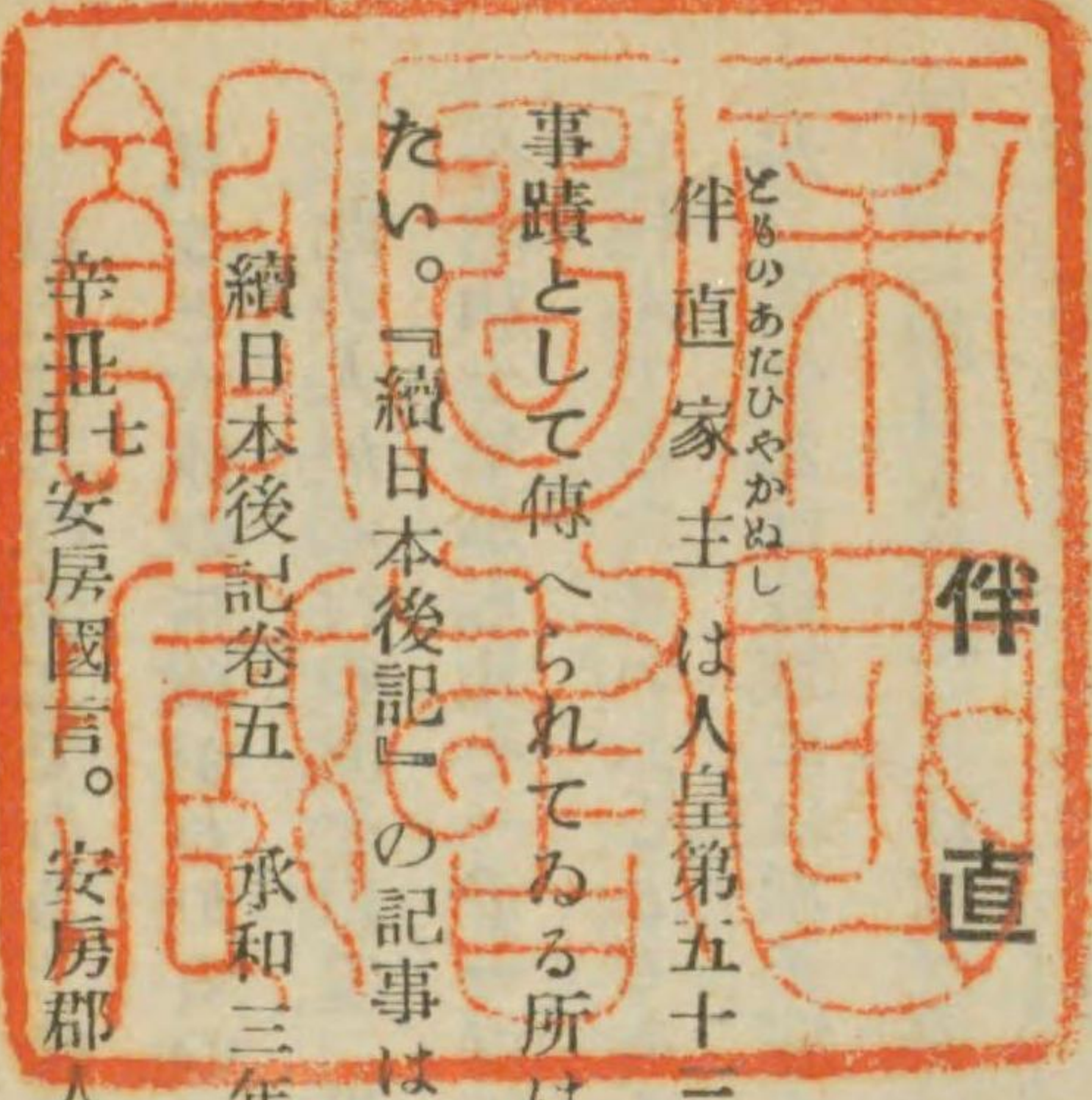
鳥山	野呂	恩田	堀江	加藤	新井	武田	山口	奥澤	石井	菱川	伴直
山	道	田	江	藤	井	田	口	澤	井	川	直
確	道	仰	顯	霞	文	石	志	軒	三	師	家
齋	庵	嶽	齋	石	山	翁	道	中	花	宣	主
.....
五七	五	四	四	三	三	二六	二〇	一五	八	四	一頁

鱸 松 塘 三
 鈴木抱山 六
 曾根靜夫 三
 畠山勇子 克

安房先賢偉人略傳

顯彰會編纂

伴直家主



とものあたひやかぬし
 伴直家主は人皇第五十三代仁明天皇の朝に今の館野村萱野の地に住んでゐた孝子である。其の
 事蹟として傳へられてゐる所は『續日本後記』の記事のみであるから、遺憾ながら詳細の事は知りが
 たい。『續日本後記』の記事は左の如くである。

續日本後記卷五 承和三年十二月七日の條

辛丑七日安房國言。安房郡人伴直家主。立性蕭默。常守孝道。父母歿後、口絶慈味。建廟
 設像。四時供養。事死如生。未嘗懈倦。量其因心。可謂孝子。敕。宜叙三階。
 終身免三戶田租。旌中門閭也。

【訓讀】 辛丑七日安房ノ國ヨリ言ス。「安房郡ノ人伴ノ直家主ハ、立性蕭默ニシテ常ニ孝道ヲ守リ、父

母歿セシ後ハ、口ニ慈味ヲ絶チ、廟ヲ建テ像ヲ設ケ、四時供養シ、死ニ事フルコト生ケルガ如ク、未ダ嘗テ懈リ倦マズ。其ノ因心ヲ量ルニ孝子ト謂フベシト。勅シテ「宜シク三階ニ叙シ、終身戸ノ田租ヲ免シ、門閭ニ旌スベシ」ト、ノタマヘリ。

以上は其の全文である。此の人について知り得る範圍の全部が之れだけである。併し之を解説して見ると大体の事蹟がわかるのであるから、今簡単に説明をして見よう。

此の人が孝行の廉を以て 畏くも 勅旨を以て特に旌表せられたといふ至上の名譽を受けたのは、今昭和十年から凡そ一千一百年の昔、承和三年十二月七日のことであつた。此の人は今の館野村萱野に住んでゐたといふことである。併し其の事實如何は何の憑據もないことであるから断定は出来ないが、現今なほ萱野には孝子塚と稱するものが遺つてゐるから、先づ其の附近に住んでゐたものと思ふ。『續日本後紀』には唯だ安房郡の人とあるのみで、郷村の名は書かれてゐない。併し此の人は普通の部民ではなかつた。伴 さものあた 直 あたひ といふのは膳 かしのほ 大伴部 おほとも の畧されたものであつて、直は其の一族の長たる者の稱號であるから、少くとも一部民の支配者たるものである。膳大伴部は彼の景行天皇の時に、安房の浮島の行宮に於て御料理を献じた磐 いはかのむつかりのみこと 鹿 か 六 む 雁 かり 命の子孫である。とにかく此の人は相當に立派な生活をしてゐたものであつて、一族は餘程多かつたと思ふ。而して天性至孝にして謹慎肅敬、常に孝道を守られた。父母の歿して後は、美味を口にせず、廟を立て、父母の像を安置し、香花飲食を供へて之を祭ること日々怠らず、父母在世の時に孝養したと同様であつた。此の事が安房の國司に聞えたので安房守從五位下藤原真綱は此事を朝廷へ上申に及んだ。すると畏くも 仁明天皇の敕間に達し 勅旨を以つて位を三階 大初位下 に叙し終身一戸の田租を免除せられ且つ其の里門に旌旗を立て、孝子の家たることを表彰せられた。三階といふのは下から三段目の位階のことであつて、即ち下からいへば少初位下、少初位上、三段目が大初位下である。また戸の田租を免すといふのは戸主一人の分の田地のみならず一戸の家族の分の田地の租も共に免除するとの意味である。當時の田地は口分田とて男女とも六歳以上の者は一人／＼に與へられてゐたからである。傳ふる所によれば當時朝廷から賜はつた旌には『孝子之門』の四大字が書かれてゐたことと其の旌も孝子の父母の像も國分寺に藏せられてゐたが後世になつて焼失したといふことである。而して又家主は恩命の有り難さに感じて毎年八月朔日には新穀を朝廷に献上したので、天皇之を嘉 よ みせられて、性を八朔日と賜ひ、保津美 ほづみ とよむといふことである。爾來その子孫は連綿として絶えず、現戸主は八朔日傳次氏といひ、船形町川名に於て青物商をしてゐる。

今の孝子塚の碑は、嘉永三年三月保田町の石匠武田石翁の建てたもので、篆額は前大納言日野資愛卿、本文は續日本後紀の文をそのまま取つて、平群村の加藤霞石翁の書かれたもの、畫は菊地容齋の筆而して彫刻はいふまでもなく石翁である。なほ國分寺の境内にもそれと殆ど同様の碑があつて、篆

額も同じく日野大納言、本文も同じ續日本後紀の文であるが、筆者は法印道本憲壽である。而して畫は石翁自ら畫いたもので、建碑の由來も刻記せられてゐる。此碑は嘉永四年九月の建設である。

菱川師宣

浮世繪の大家で版畫の開祖たる菱川師宣といへば、世界的にも知られてゐる。然るに其の事歴は頗る不明瞭であつて、明確なる傳記は到底書けないのであるが、茲には比較的正確と認める範圍内に於て略傳を書くことにする。

師宣は通稱吉兵衛といひ、晩年剃髮して友竹と號した。保田町本郷田中の人菱川吉左衛門道茂の長子である。出生年月は不明であるが、寛永の末年か正保の初に生れたといふ説が眞に近いと思ふ。(昭和十年からは)菱川家の家系は知れないが代々染物業を營み、傍ら縫箔を業としたといふ。父吉左衛門は岩崎甚左衛門の次女ヲタマを娶り、三男四女を擧げた。長子は師宣である。師宣は幼時から父の業を習つて之を助けたが、又相當に読み書きも習つたやうである。併し其の師匠の名などは全く不明である。而して十六歳の時に至り、志を立て、江戸に出で、父の知人なる縫箔師の家に寄寓して、専ら其の下繪を書いて技術を練磨したといふことである。(或は父も共に一家を擧げて)。而して其の餘暇には畫を習つたが、是れまた別に師匠はなかつたらしい。師宣は天性繪畫を好み、豊かな天分を有してゐたから、師匠なくとも名筆の畫本などを見て習つて、其の眞髓を會得したと見える。傳ふる所によれば、岩佐又兵衛の筆意を學んだものと言はれてゐるが、強ち又兵衛のみに私淑したものではない。狩野派の画も習つたに相違ないのである。而して結局は自己の一流を立てたのであるが、浮世繪としては兎に角岩佐又兵衛の流れを汲んで、それを大成し、所謂浮世繪なるものを世に弘めたのであるから、専ら又兵衛の筆意を傳へたやうに言ひ傳へられたのである。

それはとにかく、師宣は江戸へ出てから、大いに縫箔の技術も進歩したが、それよりも畫の方に多くの力を注いだので、後には天晴れ畫家として立つに至つた。それは寛文の中頃からのことであらう。而して其の畫は肉筆畫も珍重せられたであらうが、それよりも寧ろ版畫の方に於て名聲を博した。従來も版畫が全くなかつたのではないが、之に一大革新を興へて、藝術的の位置にまで高めたことは師宣の功であつて、後には浮世繪即ち版畫といふ程になつた。その先頭に立つたものは師宣であるから、之を浮世繪版畫の開祖といふも可なりである。師宣の版畫を便宜上分類して見ると二種となる。即ち一は單獨の一枚刷のもので、一は繪本文は小説本(こゝには金平本、假名草紙を始め)の挿繪等である。一枚刷のものは全く師宣の創意らしく、一枚の紙に墨で刷つたもので、彩色は筆を以てしたのである。(時には簡単な型紙を用ひたでもあらうが)之は後に發達して江戸繪となり、錦繪と呼ばれる。

に至つた。而して繪本や小説本の挿繪の類は師宣の最も力を入れたもので、其の名聲を揚げたのは主として此の方面であつた。今師宣が版下を書いたと言はれてゐる本は、百五十種以上もあるといふことである。併し、中には僞筆もあり、筆者不明のものもあるから、確實のところは百種位のものであらう。今その主なるものを擧げて見ると、『私可多咄』『新野郎花垣』『吉原大雜書』『江戸雀』『美人繪盡し』『浮世繪盡し』『日本繪盡し』『狂歌たび枕』『好色一代男』『媼男なさけの遊女』『月次のあそび』『和國百女』などである。而して師宣の最も脂の乗つて來て、其の靈筆を縦横に揮つたのは、天和年間であつて、實に師宣の最盛を極めた時代である。而して貞享になると、衰へて來て、元祿時代には其の作品は至つて少くなつてゐる。想ふに、元祿の初頃から何か病氣にでも罹つたものと見え、繪筆を執ることも次第に出來なくなつたのであらう。

さてまた、肉筆畫の方では、是亦世人の絶讃を受けたが、其の作品は版畫ほど多くはないやうである。今現に遺つてゐるもので、注目に値ひするものは、東京帝室博物館にある『北樓及演劇圖卷』で、之は師宣が寛文十二年から元祿二年までの間に、時々畫いたものを、好事家が集めて一卷としたものである。これによれば、師宣の肉筆畫に於ける靈妙の手腕を見ることが出来る。其の他三井家の元祿風俗繪卷の如きを始めて、名門富豪の秘庫に藏せられてゐるものも少からぬことと思ふ。房州は師宣の生國であり、其後裔も遺つてゐるけれど、今日まで、肉筆にせよ版畫にせよ、確かなものを所藏して居らるゝ人のあることを聞いたことがないのは遺憾である。傳ふる所によれば、保田の日本寺には師宣筆の地獄變相圖があつたといふことであるが、何時の頃からか紛失したといふことである。又同じく保田の別願院には、善導圓光兩大師の繪像などがあつたらしいが、火災のために焼失し、又後裔菱川氏の家にも多少あつたものも、寛政四年九月の大津浪に家財と共に流失したとのことである。

師宣は前にも述べたやうに、元祿の初頃からは病氣でもあつたものと見えて、畫筆を執ることは少くなつたが、元祿七年の春頃には、既に絶望に陥つたと見えて、此世の名残りに、梵鐘を鑄造して保田の別願院へ寄進し、一家の冥福を祈つた。その鐘は今も立派にのこつてゐる。其の鐘銘には、

寄進施主 菱川吉兵衛尉藤原師宣入道友竹

元祿七甲戌歲五月吉日

西ノ宮大和守藤原吉奥作

房州保田村林海山別願院 時住持欣入

と刻し、尙其の次には系圖めいたものを刻してあるが、それは略して置く。

かくして師宣は元祿七年の末頃に歿したものと思はれるが、明確なることは知りがたい。從來は『名人忌辰録』に「正徳四年八月二日七十七にて歿し」とあるのを信じてゐたが、今では元祿八年四月

刊行の『琴繪百人一首』の序文に、「菱川が古人となりしかたみなれば云々」とあるのに據つて、是より先き師宣は既に歿してゐることが判明したのである。墓は保田の別願院にあるが、之にも種々の説があつて、今のところ確實なることは断定しがたい。師宣の子は二男三女あつて、長男は吉兵衛師房といひ、畫を父に學び、相當の腕にはなつたが、父の盛名に掩はれて、餘り世に顯はれなかつた。二男沖之丞師永は彩色に巧みなりと諸書に見えてゐるけれど、事蹟は不明である。師房の子は二人あつて、長子佐次兵衛重嘉は畫家とならずに、紺屋に復業し、二男彌右衛門は之れまた畫家とならずに保田の家を立てたらしい。而して其の子孫は今も保田本郷にあつて、現戸主は菱川菊雄氏である。併し其の間の血統續柄等は知りがたい。

石井三朶花

石井三朶花は名を收といひ、通稱は彌五兵衛、三朶花は其の號である。慶安二年（昭和十年から二）九月十日今の安房郡豊房村山萩に生れた人で、父は治太夫盛定といふ人である。此の石井家の祖先は里見家第六代義堯の子右京大夫義樹であつて、義樹は永祿七年正月下總の國府臺合戦に討死し、其子石井豊前義有は父の遺訓に従ひ、歸國して主君里見義頼に忠勤を盡した。義有の子は彌五右衛門盛次といひ、里見義康忠義の二代に仕へたが、不幸にして、忠義は慶長十九年九月九日徳川幕府の嫌忌に觸れて、伯州倉吉に配流せられ、里見家は没落したので、盛次は遂に民間に下つて山萩村に住し、正保二年三月三日に歿した。石井家は此の人から後、代々山萩村に住することゝなつた。彌五衛門盛次の子は治太夫盛定で、即ち三朶花の父である。盛定は晩年に徳左衛門と改名し寛文十一年三月廿八日六十四歳で歿した。妻は福原縫殿介定頼の女で、承應三年八月五日に歿した。之が三朶花の母である。

治太夫盛定には幾人の子女があつたか不明であるが、男子は五人あつたものと思はれる。長男は治太夫定次、二男は石井主殿、三男は三朶花、四男は義一、五男は六左衛門である。之には複雑な考證を要するけれど、今茲には畧する。とにかく三朶花は治太夫盛定の三男であつたことは事實である。幼名は彌太良といつた。天性學問を好まれたが、僻地の事として、師友がなかつたので、刻苦して獨學せられた。此の事について、三朶花が後年水戸に仕へて後、藤井徳昭に與へられた書中に、

僕幼ニシテ讀書ニ志アリシモ、地僻ニシテ俗陋ク、師友ノ助ナシ。特訓點ニ憑リテ誦讀スルコト已ニ久シク、粗ボ文意ニ通ズト雖モ、音義多クハ乖キ、恒ニ書生ニ笑ハル。（原漢文）

とあのを見て推想することが出来るのである。それから二十歳の頃になつて、本多出雲守政利に仕へられた。政利は上總大多喜城主本多出雲守忠朝の孫であつて、六萬石を領してゐた。（併し大多喜に居大和國又は播磨國に於て領してゐたのである）三朶花は折角政利に仕へられたが、面白からぬ事があつたと見えて、二三年で暇

を取つて房州に歸り、勝山に住居せられた。政利は後に政事宜しからずとて、領地を沒收せられたのである。

時は延寶二年、三朶花の年齢は二十六歳であつた。此年四月、水戸の城主徳川光圀公は、何故か江戸へ出府せられる途をわざ／＼房州に枉^まげて、それから鎌倉を経て出府せらるゝこととなつた。そこで四月二十二日水戸を出發せられ、潮來から利根川を溯り、滑川附近に上陸、成田酒々井を経て千葉に出て、それから房州勝山に到着せられたのは四月二十九日であつた。而して三朶花の家に於て、晝の御休息になつたのである。此の時公は三朶花が以前に本多出雲守に仕へてゐたことを聞き及ばれ、且つその人物に感心せられたと見えて、大體召し抱へる話を進められたやうである。而して其年の十月二十三日になつて、改めて興津勘左衛門重長の推舉に依つて召抱へられた。

かくて三朶花は水戸義公に仕へることゝなつた。併しその學問は未だ大したものではなかつた。三朶花の學問が深くなつたのは水戸に仕へて後のことである。何しろ水戸は學問の淵藪であつたから、其間に在つて切磋琢磨せられたのである。而して後に右筆の役を勤められ、其の結果は『日記』二十餘卷となつたが、今日傳はらないのは遺憾である。又三朶花は何故か姓を關と改められたことがある。併しその後再び石井に復姓せられてゐる。

三朶花一代の功績中最も光りを放つものは、實に『大日本史』編修に與^{あづか}られた事である。申すまでもなく『大日本史』は水戸義公の親ら主宰して編修せられたもので、水戸學は此に其の端を發し、尊王思想の先驅となつたものである。而て三朶花が擢でられてその編修に與^{あづか}られたのは晩年のことであらうと思ふ。今も水戸彰考館所藏の大日本史稿本の中に『石井彌五兵衛撰』と自署せられた自筆の原稿が保存せられてゐる。編者の見たのは『宇都宮公綱傳』の一冊であつたが、まだその他にもあることと思ふ。之を見ても、三朶花が大日本史の編修に力を盡されたことは事實であつて、それはひとりその人の名譽のみならず、房州人の名譽とすべきものである。

それから又、三朶花の特長としては漢詩である。詩に於ては、當時濟々たる水戸文士の間^に於ても、特に優秀のものであつた。かの明から來てゐた心越禪師は先生の詩を評して、日本の李白であると激賞したほどである。併しその詩は今殆ど傳はつてゐない。僅に彰考館所藏の『史館先賢詩眞蹟』の中に二首あるのみである。今その一首を左に録する。

佛 手 柑

紫磨一指稱獨尊
方便示寂沙羅下
護念猶更思末法
東方世界藥師佛

三十二相號金仙
假緣既歸兜率天
尙留一手救沈堙
遙受遺詔取妙痊

酒飲湯送各有法	自此衆病多乎獨
佛法由來說東漸	宜也斯柑日東傳
仄聞此物出讚州	讚州密宗滿陌阡
學得大日金剛印	十爪合掌兩部全
身口意業三密壇	應化分身未開蓮
孰識一實圓頓味	生三摩耶蘇悉田
遊戲三昧喻伽場	笑命文士賦嬋娟
文士博洽通儒佛	暫時積成金花牋
昔年陸績遇名橘	童心雅思北堂邊
况微臣之逼老境	分居方覺十餘年
荒萱孤松非不思	只爲奇觀忘漁船
三取佛手三歎息	編辟竊羞陸州賢

右の詩中最終の句に編辟とあるのは、多分偏僻の當字であらうと思ふが、果して然りとせば、この二字は能くこの人の性格の一端を表現してゐると思はれる。勿論それは謙遜から出た語ではあるが、併し其の性格には確かに偏僻の点があつたことは事實である。墓誌にも「志氣豪邁、勢利ヲ屑イサギヨシトセズ」

とある通り勢利を望まず、剛直を以て任じて居られたので、一方から見れば偏僻とも見らるゝのである。故に自ら宋代の奇人に比して三朶花を以て號とせられた。時人もまた呼ぶに奇男兒の綽名を以てした。當時水戸藩の執政に藤井紋太夫徳昭といふ人があつて、頗る權威を振ひ、横暴の行が多かつた。家中の者皆之を憎むけれども、表に立つて言ふものがなかつた。然るに三朶花は少しも遠慮なく、屢々事實のまゝを義公に上申せられた。義公は最初の間は徳昭を信任して居られたが、後遂に其の奸惡を悟り、江戸の邸に於て自ら徳昭を誅殺せられた。時に元祿七年十一月二十三日であつた。徳昭が一度誅せられると、今まで知らず顔にしてゐた家臣共は、俄に恐るゝ所もなく、徳昭の惡事を喋喋するに至つたので、三朶花は「今時紋太夫様の事を悪くいひ給はゞ、恐らくは天罰を蒙り給はんぞ」と皮肉にたしなめられたといふことである。此の一言の諷刺はこの人の眞骨頭を呈露してゐる。紋太夫の陰謀については、演劇講談などに作られて、世に膾炙してゐるが、眞相は判明しない。

三朶花の著書については清水正健著『水戸文籍考』同『増補水戸の文籍』等に『破日蓮編』六十卷『勸學文』一卷、『右筆日次記』『年代記増補』『御發明書』等のあることを記載してある。而して『破日蓮編』は最も其の心血を傾注せられたる大著であつて、墓誌の中にも、

君故アリテ破日蓮編ヲ撰ス。享保五年筆ヲ起シ幾年ナラズシテ自ラ書シテ六十卷ヲ成ス。病篤キニ及び、客ニ對シテ猶其ノ書ノ成ルヲ懼ブ。(原漢文)

と記されてゐるのである。併しながらそれらの遺書の全部が今日は一冊も残つてゐないのは洵に遺憾の極である。

三朶花は元祿十年十一月進物番となり、史館の勤務は元の如くであつたが、寶永元年五月病に依て小曹請組に入り、享保九年九月二十五日に歿した。行年七十六。臨終に筆を授つて「胸開萬頃之江漢、眼觀一輪之明月」と書き了つて瞑したといふ。法名は規法道豁居士といひ、墓は水戸市常磐町神崎寺の墓地に在る。室は名をマサといひ、良人に先だつて貞享二年六月六日に歿した。法名は涼薫禪尼といふ。三朶花には男子がなく、女子二人あつたが、長女は里見與右衛門に嫁し、二女は從兄の石井源四郎定次に嫁した。而して三朶花は弟權十義正(系圖には義一とあり)の子武治を養つて嗣とした。武治は寛延三年八月二十九日四十九歳で歿したので、其の子八藏以範が家督を相続したが、何故か、安永二年十一月十四日出奔して行方不明になり、家名斷絶した。故に三朶花の遺稿の類も何一つ遺つてゐない。併しその生家の子孫は連綿として山萩に住し現戸主石井潔氏は齒科醫となつて、館山北條町に開業せられてゐる。なほ古來山萩神社の神職たりし石井家も同族の間柄であつて、現戸主石井豊徳氏は同じく館山北條町に外科醫院を開いてゐる。

奥澤軒中

房州に於ける産科醫の泰斗奥澤軒中は岩井町久枝の人で、明和元年甲申(昭和十年前から百七十年前)の出生である。父は半助といひ、文化六年七月一日に歿した。軒中はその長子で、字は岐庸、號を富山といふ。富山は邑の名山富山に取つたものである。幼時の教育も醫學の師承も不明であるが、その名著『産科發明』の本文は漢文で書かれてゐる所を見ると、漢學の方面にも可なり造詣の深かつたことがわかる。勿論その頃の醫學は殆ど悉く漢方であつたから、苟も醫師たる人には相當漢文の力を有してゐなくてはならぬ筈ではあつたが軒中の如きは、その中でも一頭地を抜いてゐたものである。

とにかく、軒中は産科の専門醫として、少くとも房州の西部地方に於ては名醫として推稱せられた。傳ふるところによれば、軒中は妊婦の都合によつて、出産の時期を希望のまゝに早めたり遅延したり、自由自在にせられたさうで、又如何なる難産でも、軒中の手にかゝれば安産したといふことで、時には産婦の側で軒中様の名を唱へるだけでも安産すると傳へられてゐる。言はゞお産の神様ともいふべきであつた。而して斯くまでに巧妙を極めた軒中の醫術は、何處で如何なる人から修得せられたものか全く不明である。併し初は全く漢方のみであつたらしいが、後には和蘭の醫術を取つて折中せられた。晩年圓熟せられた醫術は漢蘭折中であつた。而して軒中が蘭方を修得せられたのは長崎

遊學の時であつたらうが、其の年代は不明である。併しそれは餘り弱年の時のことでなく、三十歳乃至四十歳位の頃ではなかつたかと思ふ。而して軒中はそれまでに十分漢方醫學に據つて研究の基礎を固め、一方に於ては獨自の實地研究を積まれてゐた。此の点が大いに敬服すべきところである。何しろ漢方醫學では萬物の靈長たる人間の身体を解剖するなどといふことは殆ど絶對になく、内臓の解説の如きは想像や臆測に依つて説を立てゝゐるから、實物とは全く天地雲泥の差で、實に奇怪千萬なるものが多い。軒中は之にあきたらず、自ら進んで實地に研究せられたのである。併し人体の解剖は到底自由には出来ないことであるから、唯だ死産の時に、胎兒につきて研究を試みられる位であつて、主として鹿と猿とについて解剖を試みられた。幸に其の頃は房州の山林にもそれらの動物が多かつたから、數百匹といふ多數について實驗せられた。その事について『産科發明』に

余青年ヨリ、右ノ如ク種々解体シ、始メテ卵ノ聚ル所ヲ名ヅケテ卵室ト爲シ、又卵實、象卵、成卵ノ目ヲ立テ、以テ門生ニ示ス。其ノ後和譯ノ蘭書ヲ見ルニ、卵巢ノ目アリ。此レ余ノ見ト暗合ス。嗚呼奇ナルカナ。

と書かれてゐる。以て其の研究的態度を見るべきである。

右に據つて、軒中が既に青年時代から屹々として實地研究に没頭せられてゐたことがわかる。而して後に長崎に遊學して、蘭方醫について修業せられたのであるが、其の年代も遊學の期間も全く不明

である。併し其の期は餘り長いことではなかつたと思はれる。或は寧ろ長崎よりも江戸に於て蘭學者に就いて學ばれた方が多かつたのでは無からうかと思ふ。後年のことではあるが、天保十年の夏平群某村の農婦某が雙頭兒を生んだ時に、軒中は有名なる蘭學者坪井信道先生と共に之を解剖せられたことがある。之を見ると以前からは等の名醫と親しく交際せられたらしく、時には從學せられたこともあつたものと思はれる。とにかく軒中の醫術は漢蘭折中によつて大成したものであつて其の研究の結果は一部の『産科發明』となつて發表せられた。此書の出版は天保四年七十歳の時である。其の序文は大田玄齡、小澤道茂の二人が書いてゐる。大田玄齡は如何なる人か不明であるが小澤道茂は軒中の親友であつて、同じく久枝の人權左衛門といひ、郷黨の子弟に讀書を教へてゐた人であるといふことである(今の小澤榮三郎氏は其の後裔なり)。その序文中に

今醫ヲ以テ門戶ヲ立ツル者、或ハ命ズルニ漢ヲ以テシ或ハ命ズルニ蘭ヲ以テス。是所謂區々然トシテ前人ノ陳跡ヲ踏襲スルモノナリ。先生ハ乃チ然ラズ。漢ヲ學ブヤ久シ。蘭ヲ學ブモ亦久シ。而シテ其ノ著ス所ハ漢ニ非ズ、蘭ニ非ズ、皆自己ノ發明スル所ニシテ一家ノ格言ナリ。(原漢文)とあるが、能く其の真相を道破してゐると思ふ。而してまた

余ヤ先生ト交ハルコト深ク、先生ノ心ヲ知ルコトモ亦甚ダ深シ。先生早歳ヨリ未ダ嘗テ心ヲ俗事ニ留メズ、惟ダ醫事ヲ研窮シテ以テ一家ノ言ヲ立ント欲ス。是レ先生ノ夙心ナリ。

とあるを見れば、軒中の人と爲りを知ることが出来るのである。

さて、軒中が苦心の結晶たる『産科發明』は上中下の三卷から成つてゐて、總紙數は百四十三枚である。書物の分量としては大著述と申すことは出来ないが、其の内容は悉く独自の實驗録であるから、素人にも面白く讀まれて、趣味津津たるものが多い。今その一例を擧げて見ると、

一ノ婦人逆産シ、其兒兩足ヲ出ダシ、髀骨以上出デズ。故ニ尊母(産婆)己ノ兩足ノ跟跡ヲ産婦ノ兩胯ニ當テ兩手ヲ以テ兒ノ兩足ヲ握リ引出サントス。兒ノ足將ニ抜ケントスレドモ出デズ。此ニ由テ産婦モ眩暈シ、其命將ニ終ラントス。故ニ不レ得レ已シテ余ヲ迎フ。余往テ之ヲ診スルニ、兒腹ノ大サ臍輪ノ如ク是レ水病ヲ患フル兒ナリ。是ニ於テ曲刀ヲ以テ其兒ノ腹ヲ割ケバ水流出ルコト數升。兒モ亦從テ流レ出ツ。故ニ其母モ亦活ルコトヲ得タリ。

右の如き手術は、今日の醫學から見れば、通常のものであらうけれども、當時にあつては新しいものであつたに相違ない。而して是等の手術は、蘭方から取つて用ひられたものも多かつたであらうが、又独自の創意によるものも尠くはなかつた。而して又その器械の如きも、自己の考案工夫によつて製作せしめられたものが多い。今『産科發明』の中に書かれてゐる手術の二三を拾ひ上げて見ると、割頭術、割宮術、除臟術、水銃術などがある。又それらの手術に使用せられた器械には束頭械、整頭械、出頭械、除臟器、管刀、大小鈎などの種類が擧げられてゐる。

軒中の著書は『産科發明』の外に『産科發明附録』一卷、『産燈』二卷、『血脈詳解』四卷、『神經割』三卷、『雜病皆疑』二卷、『婦人經驗』一卷等がある。併し是等の書は出版出来なかつたものであつて、而も今日では、稿本すら散佚して一部も見ることが出来ないのは遺憾である。

軒中の人と爲りは沈黙寡言で、人と争はず、世に媚びず、淡泊無欲で頗る温厚篤實の人であつた。酒は非常に嗜好せられたので、肖像にまで酒肴を前にしたところを描いてある。その肖像は天保九年の秋七十五歳の時のもので、落款には「戊戌孟秋上浣應需寫齋樵夫」とある。齋齋は菅野由章といひ、仙臺の人で、天保弘化の頃江戸に住した畫家である。又肖像の上には、

題富山老翁肖像

房之富山	生此哲翁	産科絶類	軒蘭折中
咸稱國寶	發明頗崇	虛文匪街	實測維窮
噫天成德	五福保躬	壽七旬五	休哉令終
前任金臺寶莖			

右の如き賛が書かれてゐる。金臺寶莖は北條町金臺寺の前任寶莖師のことであらう。軒中は此の肖像を描かしてから、中一ヶ年を隔て、天保十一年十月八日に歿せられた。行年七十七歳であつた。法號は奥澤院昂譽寶蓮軒中居士といひ、墓は岩井町久枝の蓮臺寺にある。軒中には實子がなかつたか

ら、親族の子を養つて嗣とせられた。その人は軒雄といひ醫を業とした。軒雄の子は祖父の名を取つて軒中といひ、醫を業とし、傍子弟に漢學を教へ、又縣會議員に選舉せられたこともある。明治二十一年十一月二十三日歿し、其の相續者は今の戸主奥澤議氏である。

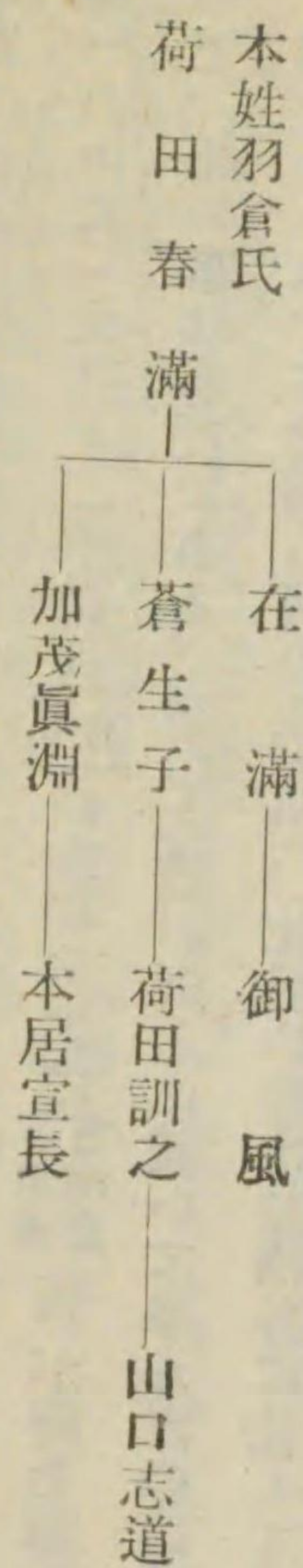
山口志道

山口志道通稱は利右衛門といひ、杉庵と號す。又崇山とも號した。吉尾村寺門の人で、明和二年(昭和七十年前)乙酉の出生である。資性濃厚、幼にして既に奇才を以て稱せられたといふ。父母の名は明かに知れないが、代々利右衛門といひ、屋號を材木屋と呼ばれてゐた。故に昔は材木商であつたかと思ふ。併し志道の父の時代には農業であつた。志道は少年時代には、近傍の安國寺の大和尚に就いて漢籍を學ばれ、二十五六歳の頃に、江戸へ遊學せられたといふことである。丁度寛政元年の頃であるから、好學の執政松平定信の時代とて、儒學には柴野栗山、古賀精里、尾藤二洲等の碩學が儒官に擧げられ、民間には山本北山、龜田鵬齋等が出で、國文學にも加藤千蔭、村田春海など多數の名家が出て江戸は正に學者の淵藪であつたから、志道の遊學は最も裨益する所あつたに相違ない。幸に伯母や叔父の家があつたから、其處に止宿して諸大家に出入せられたといふ。その伯母叔父といふのは、日本

橋大傳馬町目横町の長井利兵衛、同日本橋堀留二丁目の板屋與兵衛であつた。而して志道の就て學ばれた先生は何人であつたか不明であるが、志道の學問は漢學よりも國學であつたことは事實である。下總國の人荷田訓之(かたののりゆき)に師事したといふことであるが、確かに志道は訓之から稻荷の古傳を受けたことは事實である。併しそれはすつと後のことである。文化十二年五十一歳の時のことである。志道の著『水穂傳』の中に「文化十二年長月(九)の末荷田訓之(下總國古河産)吾が庵を尋ね來て古傳なるものを授く」とあるので、此の事は事實である。併し志道が訓之に就いて學んだのは其の以前からであらう。訓之は本性を羽倉といひ、下總國古河の生れで、江戸の數寄屋橋外に住してゐた狂歌師である。算木有政(さんぎ)と稱し、別號を常總庵といつた人で、此の人の弟も草屋師鯨(くさやらあぢ)と號した狂歌師であつたといふ。訓之は文政六年三月に歿したが、行年は七十歳位であつたと思はれる。狂歌師といつても、國文學の素養はあつたであらうから、志道が此の人に就いて國文國學を學ばれたといふことも不合理とは思はれないが、一代堅實なる國學や神代學を鼓吹せられた志道が狂歌師に長く從學せられたとは信じがたい。(此の事考證は省略する)

とにかく志道の學問の師承は明確に知れないが、五十歳までの間は江戸にも遊學したり、郷里に於て農業をしながら好きな學問をせられ、又附近の子弟などに教へられたこともあつたと思ふ。而して五十歳の頃に一人娘に嫁養子を迎へられたらしい。此の養嗣子は同村三上氏から來た人で、長兵衛と

いふ人である。かくて志道は家政を長兵衛に譲つて置いて、江戸へ出られたものらしい。而して其の翌年、荷田訓之から稻荷の古傳を受けられたのである。志道の江戸に於ける住所は芝口であつたことは『安房日記』によつて判るが、其の時には訓之は淺草に居られた。稻荷古傳といふのは、古代から山城國伏見の稻荷山神社に傳はつたもので、水火の御傳ともいひ、天地萬物を始め人の呼吸言語までも、悉く火と水とによつて成立つてゐるといふ説である。殊に五十音圖の成立を水火によつて説明してあるのが骨子である。此の古傳が稻荷山の社務秦親友卿の家に残つてゐたのを荷田春滿に傳へ、それから春滿は娘の蒼生子へ傳へた。蒼生子は江戸淺草に住し、天明六年に六十五歳で歿した人である。此の人から荷田訓之に傳へたのを、また訓之が志道に傳へたのである。今その學統を圖に示すと



右の如くであるが、稻荷古傳は主として蒼生子に傳へたものと見えて、在滿や加茂眞淵などは餘り其の説を唱へてゐないやうである。とにかく志道は此の古傳を一層深く研究して、殆ど前人未發の學説を築き上げたのである。元來志道の家には布斗麻爾ふとまにの御玉といふものが傳へられてゐたさうで、(五十音圖の如きも)それに就て三十年餘も研究して居られたところへ、荷田訓之から古傳を授けられたの

で、大に啓發せらるゝ所があつて、前人未發の神代學を開かれたのである。而して志道は江戸に於て其の説を唱へられたであらうが、餘り發展しなかつたらしい。そこで文政十二年六十六歳の時に、いかなる手蔓があつたものか京都へ上られた。之が志道の世に出た初である。併し最初から信するものはなかつたであらうから、随分困難せられたらしい。而して大阪にも行かれたり、丹波の龜山にも或は伊勢、大和、近江などにも行かれたりして、各地に講説せられた。大阪では柴山老山、龜山では福井清秀の家に寓せられてゐた。而して天保二年正月龜山の寓居に於て、初めてその大著『水穂傳』の稿を起されたのである。住居は勿論一定せず、轉々して居られたが、著述は到る處で筆を執られた。其の間に追ひ々名も顯はれて、上京後四年目頃からは公卿摺紳の間にも知られるに至つた。即ち天保四年正月からは、聖護院宮に出入して講義せられることゝなつた。その講義はいふまでもなく志道獨特の神代學で、『古事記』でも『萬葉集』でも、悉く水火の理を以て説くのであつて、而して歸する所は五十音圖の神秘的解釋であり、遂には水火を以て呼吸作用を説明し、『神風伯』(かみかぜ)と稱する秘傳一卷を作り、靜坐呼吸の方法の如きものを説かれた。とにかく志道の名聲は漸く高まつて來て、雲の上までも聞えるに至つた。

志道は至つて視力が強かつたと見えて、老齡にも拘はらず、眼鏡なしで瞿麥粒けしのやうな字を書いた人である。天保五年正月のこと、志道は百人一首全部を富士山の形に一枚の紙へ書かれたものを大西

下總守へ進上せられたところ、下總守は二月四日に、畏くも之を光格上皇様の叡覽に供し奉つた。上皇叡感淺からず、之を御手許に留め置かせ給ふことゝなつた。下總守は叡慮を承けたまはつて、院中の弘御所の御階の紅梅一枝を折つて志道に賜はつた。なほ此の時の事であつたか、後の事か判然しないが、百人一首中の田子の浦の歌を房州勝山の田子浦と解釋したので、田子の浦人の號を得られた。かくて名聲は益々揚り、公卿摺紳の入門者が二十餘人の多きに上り、其の他士庶の入門者も多く、大阪を始め近畿の國々の人も、又遠くは越後あたりの人までも入門するものがあつた。又紀州前大納言従一位徳川治寶卿の招きに應じて、和歌山へも行かれた。併し志道は寄る年波と共に、故郷を思ふこと漸く深くなつて、遂に天保十一年の正月には、七十六歳で一度房州の故郷へ歸つて來られた。而して一二ヶ月滞在して再び京都に上られた。其の時孫の重二郎を伴ひ行かれたやうである。重二郎は名を志恭といひ、學問もよく出來た人である。

かくて志道は上京して、其の年即天保十一年には、六月高野山に登り、父母の碑を建て、七月には高野山中の新玉川に臨み、古來毒水とて人の恐れた水を両手で掬ひ飲んで無毒の證明を示し、長歌を詠じて石に刻し、之を其處に建てられた(碑は八月十五日に建てたもの)。かくて志道は京都に歸り、翌天保十二年は事なく過ごされたが、其の翌天保十三年に至り、病に罹られて、遂に七月十一日に歿せられた。行年七十八歳であつた。

辞世

今日はくれ明日はあくと思ひしに

遠きあしたのつゆときえゆく

葬儀等は如何であつたか、何等の記録もないが、多分火葬して愛孫志恭が故郷に歸葬したのであらう。其の墓は吉尾村寺門の先塋の次にある。而して志道の歿後八年を経て、嘉永三年十月二十一日に至り、神祇伯資敬王から齋瑠イッキタマレイシン靈神の神號を贈られた。

志道の著書は『水穂傳』七卷、『火水與傳』一卷、『百首正解』三卷、『祝詞正解』一卷、『萬葉集言撰』二十卷、『古今集言撰』十卷、『旅寢の夢』二卷、『安房國勝景圖繪』四卷等である。其の中で水穂傳、火水與傳、百首正解の三部だけは刊行せられてゐる。尙志道は國學和歌の外に、繪畫彫刻の方面にも、専門家を驚かすほどの技術を有せられてゐたことは注目に値ひする。

志道には女子一人あつて、その躰養子長兵衛が相續した。長兵衛も後に利右衛門を襲名し、其の子茂兵衛が相續し、(重二郎志恭は早世した)茂兵衛の次には養子善一郎が嗣ぎ、其の子茂一氏は現戸主で、目下米國に行つて居られるとのことである。

武田石翁

武田石翁は本名を小瀧周治といひ、保田町元名に住してゐた石匠である。或は石匠といふよりも、彫刻家といつた方が適當であらう。號には是房、壽秀、天然齋、天然道人、石翁など種々の號を用ひられた。此の人はもと本織村字戸(今の國府村)の人で、安永八年己亥の出生である。(昭和十年からは)父は鎌田四郎左衛門金明といひ、母は坂田氏、石翁は其の末子である。傳ふる所によれば、此の鎌田氏の祖先是甲斐の武田氏の一族であつて、何時代の頃かは知れないが、武田本織といふ人が房州に来て、今の本織の土地を開いて住したのが始祖であるといふことである。依つて其の地を本織村といひ自分の住所を武田と稱したといふ。其の後姓を鎌田と改め、幾代かを経て、四郎左衛門金明の代になつたのである。とにかく舊家であつて、代々名主を勤めてゐた。(武田に復姓したのは石翁の晩年のことであつて、實家も武田に復姓し、今の戸主は武田安太郎氏である)。さて石翁は幼少の時から、粘土を以て物の形を作つたり竹木を以て細工をしたりなどして遊ぶことを好み、夙に其の豊かな天分を發揮したといふことで、殊に七歳の春には、櫛の木の株を用ひ、其の瘤を利用して天狗の面を彫刻したが、鉛の眼球は左右に動き、又能く舌を出すといふ技巧を凝らして人々を驚かしたといふことである。而して學問の方は村の寺小屋へ通はれたが、餘り勉

強もせず、好みもせられなかつたので、父母は將來に見る所があつて、十三歳の時に保田町元名の石工小瀧勘藏の許へ弟子に遣はされた。すると、天分才能は忽ち發達して、十九歳の時には天晴の腕前になり、白濱村の辨天祠(今白濱町野島の嚴島神社辨天様)に七福神を彫刻するに至つた。(現に存)而して二十三歳の時即ち享和元年には、勘藏の養子となり其の女いちの掣となられた。それから四十歳までの間は、名も格別に顯はれず、製作品の如きも、今日まで傳はつてゐる傑作は殆どないのであるから、先づ其の間は其の修養時代ともいふべきものである。その間に二男三女を挙げられた。而して四十歳の時即ち文政元年の頃には、其の拔群の技は漸く世の中に認められ、評判が高くなつて來た。翁が石翁の號を用ひられたのは四十歳の時からである。

石翁は幼少の時には、餘り學問を好まなかつたが、石工としての技術が上進するにつれて、深く學問の必要を悟られたと見え、三十歳の頃からは、餘暇を以て勉學せられた。漢文も相當に讀み且つ書くまでになられた。又書道も習はれたが、殊に畫は彫刻との關係最も密接であるために、餘程修養せられたやうである。勿論其の道に於ても豊かな天分があつたので、師匠はなくとも相當に上達せられた。而して趣味の方に於ては、益々廣く深くなり、俳諧、琵琶、謠曲、造花、茶道、醫術、卜筮までもやつて、殆ど通達せざるなしといふ有様で、誠に多藝多能の人であつた。石翁は身長餘り高からず、寧ろ短軀といふべき方であつたが、肥えて頗る強健の體格であつたらしい。性質は濃厚篤實で、

義を守ること固く、言語は寡黙の方であつた。而して所謂名人氣質であつて、利慾や名聞には淡泊であつて、藝術には凝り性であるから、家庭の生活には頓着せられなかつたので、家政は窮乏がちであつた。そこで家庭内にも風波が絶えなかつたと見えて、四十二歳の時には、(文政三年)養家を追ひ出されたことがある。その時、

素の子にも馴れて寢安し大晦日

と一句を吐かれた。追ひ出されて何處に居られたかは不明であるが、大晦日にも疊の上に寢られなかつたらしいのに、却つて、呑氣な氣分で居られた所は凡俗ではない。併し間もなく養家に復歸せられたのである。

今石翁が名人氣質の一二の例を舉げて見ると、寛政十年二十歳の時に、上州榛名山に登り、瀧口の龍を彫刻せられたが、それから後は絶えず心がけて、胴も尾も完備した龍を作りたいと念願して居られた。其のために心中頗る懊惱せられたが、未だ神來の感興至らずして、荏苒二十年を過ごされたところ、文政元年正月七日(四十歳の時)の夜に至り、夢中に山谷鳴動し、天地晦冥の間に、一角二角無角の三龍現出し、頭部より尾部まで全部明瞭に看取することを得たので、覺めて後大に喜び、直に黒石を以て一角の龍を刻せられたといふことである。又或時には、荷馬の床置を彫刻するについて、わざわざ馬士に馬の腹帶の締め方を教へてもらはれた。又摩利支天の像を作らうとしては、力士の寓居を

訪づれて、信仰の由來を尋ねられたりもしたといふことである。神の像や孔子老子などの像を作られる時には、齋戒沐浴して、謹慎に謹慎を加へて製作せられた。されば其の作品は皆それらの風韻雅致を存してゐて、一見他の凡作と區別し得るのである。今翁の作品で各所に散在して保存されてゐるものは五十餘種あるが、茲に其の中の主要なるものを舉げて見ると、翁の曾孫保田町元名の小瀧實松氏方には惠比壽像(石)肉池(同)獅子文鎮(同)山水硯屏(同)狂獅子(同)延命地藏尊半跏像(木)山水の欄間(同)三面大黒天(同)弘法大師(同)虫喰栗の根付(同)人丸像(同)等がある。之を見ると、翁は石彫のみならず、木彫にも精妙を極めて居られたのである。又保田町元名の存林寺には、開山雲嶺禪師の石像、蝦蟇、兎等があり、其の他鶴崎神社末社の菅公像、昌龍寺内駿河屋墓碑臺石の獅子に牡丹の彫刻保田町神崎梅吉氏所藏の役ノ行者の像、勝山町間敏子氏藏の神農像、瀧田村白山神社の水盤雨乞蛙、太海村平野仁右衛門氏所藏の鐘馗像、菅公像、本織曹門院の地藏尊、豊房村山萩福樂寺の寶篋院塔、吉尾村大畑永井政吉氏藏の牧童吹笛の置物、君津郡金谷村鈴木誠之助氏藏山水硯屏、肉池、獅子置物同郡貝淵の鹿島新五郎氏藏老子像、遠くは越中國富山市の薬屋岩瀬總盛堂の獅子置物など一々擧ぐるの煩に堪へない。而して、石碑の方に於て注意すべきものは、館野村萱野の孝子塚及國分寺の碑である。此の碑は、仁明天皇の朝に旌表せられた孝子伴直家ごものあたひやかぬし主の遺跡を顯彰したものであつて、専ら石翁が發起盡力して建てたものである。(孝子の事蹟は本書の伴直家主の傳にあり)。その資金は寄附募集に依つたのである

が、思ふやうに集まらず苦心せられた。時に越中富山の賣藥行商人油屋太郎兵衛といふ者が此の事を聞いて感心し、十金を寄附したこともあつた。斯くて漸く嘉永三年三月になつて孝子塚の碑が先づ出来た。時に石翁は七十二歳であつた。其の翌年九月には國分寺境内に同じ様な碑を建て、畫は自ら書かれた。勿論彫刻は何れも石翁自身の手になつたものである。此の建碑は翁の美舉の一つである。なほ面白い碑としては、稻都村山名の智藏寺にある酒豪八郎右衛門の墓碑の如きものがある。

さて石翁の名が高くなると、江戸あたりにも聞こえて、諸侯の門にも出入せらるゝに至つた。殊に外櫻田の大岡紀伊守忠純公には眷顧を受けられた。交友は頗る廣く、當時有名であつた大沼枕山、亀田綾瀬、巻菱湖、大江蔣塘、峯田楓江、新井文山、鱸松塘、加藤霞石、千華胤禎などは皆相知の間柄であつた。かくて、石翁は安政五年八十歳の春を迎へられると、其の三月には相州三崎の豪商南部屋に招かれて三崎に渡り、五十日ばかり滞在して、千手觀音を彫刻せられた。歸郷せられると、間もなく床に就いて、遂に老病の爲に八月四日に歿せられた。法名を白堂石翁信士といひ、長徳庵(現會)地内に葬られた。墓石は碑頭に如意輪觀世音の像を刻したもので、生前の自作である。又石翁は病臥中に一寸ばかりの石に三匹の獅子の活躍する勇姿を細刻せられた。その内部は鑿彫りにして一個の球が入つてゐる。八十歳の作として、其の視力の健全なること驚くべきである。石翁の長子は金藏といひ、孫は新右衛門といつた。新右衛門の長子は即ち當主寅松氏で、石翁の曾孫である。

新井文山

新井文山名は世傑又は世文、字は宏明、通稱は文左衛門といひ、文山は其の號である。また漁々翁天門などの別號がある。幼名は亥之助といひ、安永八年己亥(昭和十年からは百五十六年前)の出生で、父は三九郎といふ人である。三九郎は今の館山北條町新井浦に住して、漁業を營んでゐたが、頗る貧窮であつた(新井浦は其の頃長須賀村に屬してゐた)。しかも三九郎は早く歿したので、亥之助は母の手に養育せられた。母は常に魚類を賣り歩いて、辛うじて生計を立てゝゐたが、それでも餘裕のある時は、近隣の貧困者に施與をせられたといふことである。

さて、亥之助即ち後の文山は、六歳の時から、同じ新井の土地にある淨土宗三福寺の住職秀哲上人に就いて、讀書習字の初步を習ひ始められた。而して十歳の時から、柏崎(今の館山北條町柏崎)の鈴木直卿に就いて漢籍の句讀を受けられた。その當時に於ては、貧困なる漁夫の子が、之れだけの教育を受けられるのも容易ではなかつたと思はれる。併し教育はそれのみではなかつた。十四歳の時即ち寛政四年には江戸へ遊學して、杉浦西涯先生の門に入り、詩文等を修められた。西涯先生はその時には小身の旗本であつて、名は吉統、字は總仲、通稱を市郎兵衛といひ、旗本の子弟等に教授してゐたのであ

る。其の後文山は更に昌平校の祭酒林述齋先生の門に入り、佐藤一齋、松崎謙堂の諸先生に従學せられた。貧困にして且つ身分の低い文山が、どうして堂々たる大家の門に入學することが出来たものは疑問であるが、想ふに、三福寺の秀哲上人は勿論、館山藩士の中にも後援する人があつて、其の手引によつて入門したものと思ふ。とにかく文山は當時最高の學府たる林家の門に入つて勉學せられたのである。其の間日夜孜々として刻苦勉勵せられたので、學業の進歩著しく、儕輩より一頭地を抜くに至つた。かくて江戸に在ること十四年にして、文化三年二十八歳の時に郷里新井に歸り、家塾を開いて近隣の子弟に教授せらるゝことゝなつた。而して其の餘暇には、母を助けて自分も魚類の行商をせられたといふことである。而して、歸郷後二三年にして内室羽山氏(名は元)を迎へられた。さて文山の本姓は林氏であつたが、元服の後は幼少よりの名亥之助を潤藏と改められた。故に此の頃は林潤藏と申されたのである。(新井文山と改められたのは館山藩に仕へられてからである)。それはとにかく、文山の生活は塾を開かれて後も、相當に苦しかつたと見えて、内室羽山氏の如きも、文山を助けて貧苦と戦はれた。併し文山の學識德行は次第に世に知られて、門生も増して來たので、文政十一年五十歳の時には、新に宅地を求めて家屋を新築せられた。元の屋敷は海岸に近い今の沃度會社の附近にあつたが、其の家は長男賢藏(醫者)に譲り、自分は別に其處から少し離れた東方に轉宅せられたのである。而して次男大吉(號桃溪)が儒學を修めて其の跡を相續するやうに定められた。而して今度新築せられた書齋には、如不及

園或は鳴鳳樓と命名せられた。

かくて文山の名聲は益々高くなつたので、其の徳望は領主館山侯に知られ、天保七年五十八歳の時に、遂に召されて經學の講釋を申上げることゝなつた。時の藩主は、後に老中にまで昇進せられた稻葉家歴代中の英主兵部少輔正巳公であつた。公は文化十二年の出生で、此の時二十二歳であつたが、此の年天保七年の三月十四日に、始めて領地館山へ入部せられたのである。而して館山の陣屋(今の館山の南にある御屋敷の地)へ到着せられると、直に文山を召出して經書を講ぜしめられた。其の時文山は左氏傳を講ぜられた。文山は感激の餘り左の詩を賦せられた。

生來多病伍三編氏 仕路官情擲若塵 不計樵漁蓑笠老 講經較レ美有周人

かくて文山は天保九年五月二十一日に至り、士分として帶刀を許されたが、時に六十歳であつた、文山は此の頃姓を改めて新井と稱し、通稱を文左衛門名を世傑と改められた。翌天保十年六月には依米若干を賜ることゝなつた。而して正巳公が文山を信用せられることは益々渾く、翌天保十一年五月二十二日には、領内巡視のついでに、文山の住居へ駕を枉げられたことがある。其の時文山は生憎出教授のため不在であつた。すると公は又六月六日にも出遊の途次再び立ち寄られた。その時も文山は釣りに行つて不在であつたが、斯くまで公は屢其の家を訪はれるほどであつた。かくて文山は益々公の恩遇を受け、天保十三年十月には郡奉行となり、目付を兼ね、祿二十五石三人扶持を賜はることゝ

なつた。

さても其の頃は幕末のこと、海警の報漸く繁くなつて來た。弘化三年五月二十七日、アメリカの使節ビツドルは軍艦に乗つて浦賀に來り、幕府に通商を請はうとした(ペルリの來たより)。幕府では大騒ぎになり、附近の大名に警備を命じた。その時館山藩では、文山に命じて、士卒を引率して相州下浦へ出發せしめた。文山は直に船に乗つて鶴崎の附近に到着し、三浦半島の東海岸を守備せられた。幕府は例の通り拒絶して追返したが、米艦も沿岸の防備嚴重なるを見て、おとなしく歸り去つたので、文山も無事歸還せられた。時に六十八歳であつた。

かくて、文山は晩年は大いに上下の信用も厚く、名譽も高まつて、比較的幸福にくらされたが、嘉永四年七月二十四日七十三歳で歿せられた。法名は林照軒宏譽文明居士といふ。墓は三福寺の墓地にある。而して門生達が嘉永六年三月に建てた碑は三福寺の本堂の前に在つて、佐藤一齋先生の撰文で、書は關淡海、彫刻は保田の武田石翁である。

文山の人と爲りは一齋先生の碑文中にある通り、容貌は魁偉で、音聲は大きく、頗る氣骨があつて、而も濫雅人に接するといふ風であつた。學統は申すまでもなく朱子學であつたが、併しそれに深く拘泥することなく、専ら適用を主とせられた。而して詩文は得意の方ではなかつたらしいが、それでも十餘冊の詩集草稿が今に遺つてゐて、大いに見るべきものがある。經書の註釋には四書輯釋の補

註がある。文山の交友には武田石翁、千葉胤禎、山下玄門、宮澤竹堂などがあり、又一代の奇傑大原幽學とも親交があつた。門下生は百を以て數ふるほどであつたといふが、恐らくは千を越えたことであらう。文山に關する逸話としては、有名なる松平越中守定信(樂翁)公の家老某が、主用を以て房州へ出張して來られた時、潮留橋(今の館山と北條との境)の所で下馬して、文山の住宅附近を通行する間徒歩せられたとの話がある。之は文山の徳望を聞いて、敬意を表せられたのである。又或時、文山は何かを書きかけて、「以上」の字をフト忘れられた。すると直に二階の障子を明けて、前の床屋を呼んで、「庄兵衛々々イジヤウの字はどう書くかのう」と尋ねられた。庄兵衛は「先生はどうお書きになるか知らないが、私は以もつてといふ字と上うへといふ字を書きます」と答へたさうである。之によつて見ても、卒直にして飾らざる襟度を窺ひ知ることが出来る。

文山の子女は室羽山氏には三男六女があつた。(後妻佐久間氏にも一女があつたといふことである)長男賢藏は醫を業として一家を立てられた。二男大吉は父の後を承けて儒となり、名は世業、字は可大、號を桃蹊といひ、廢藩の後は小學校等にも教鞭を執られたが、明治二十一年九月に歿した。三男は早世し、女子は皆嫁した。桃蹊の一子道之助が家を嗣ぎ、明治四十三年十月に歿し、今は其の子潤氏が當主として大阪に住せられてゐる。而して桃蹊の女なるは出雲景明に嫁し、其の女ひで子刀自は現に館山に住して、文山の遺物遺稿の類を藏せられてゐる。



加藤霞石

加藤霞石名は濟、字は世美といひ、霞石は其の號である。平群村平久里中の人、享和二年(昭和十年
から百三十三)の出生で、父は幸右衛門といひ、母は和田氏である。此の加藤家は源頼朝の臣加藤景廉の末孫であるといふことで、徳川時代には代々名主を勤め、嶺岡牧場の牧士を兼ね、又醫を業としてゐた。霞石は天性和易恬淡にして、名利を好まず、頗る飄逸の風があつた人である。少年時代の教育は何處で受けられたか不明であるが、想ふに、附近の寺僧なり又家庭なりで受けられたのであらう。而して十五六歳の頃から、醫學に志して江戸に遊學せられ、足立長雋シヨウといふ洋方醫家に就いて學ばれた。長雋は字を世茂、號を無涯といつた人で、初は漢方を學び、後に蘭方を修め、西洋産科を以て一家をなした人である。かくて、霞石は二十歳の頃に歸郷して醫業に従事せられ、大山村平塚の内木氏(名は勝)を娶られた。そして翌年長男復(後に三圭と號す)が生れた。霞石は勿論熱心に醫業に従事せられたが、元來文墨の道に多分の趣味を持たれてゐたから、餘暇には多く其の方面に娛樂を求められた。それが次第に進んで来て、後には本業の醫者としてよりも、詩人書家としての名が世に高くなつて來た。

天保四年三十二歳の時、笈を負うて遠く長崎に遊ばれた。それは勿論和蘭醫學の研究が目的であつ

たに相違ないけれども、事實に於ては、文人墨客の訪問や山川海陸の景勝を觀て、吟囊を肥やされる方が多かつたらしい。霞石の唯一の詩集たる『搦靄山房詩』の中には、此の時の詩が數十篇戴せられてゐる。その詩に據つて大体旅行の狀況を知ることが出来る。即ち出發は天保四年三月頃であつて、路を東海道に取つて大和國に入り、紀伊の高野山に登り、大阪から船に乗つて、途中廣島や嚴島、錦帯橋などを觀て赤馬關に達し、それから立海灘を渡つて、四月の末頃に長崎に到着せられた。而して長崎滞在は二月ばかりであつたらしいが、其の間は蘭方醫家を訪問して、多少の醫術を修得せられたことは勿論である。併し詩集に見えてゐる所は、日高鐵翁や木下逸雲などの文人畫家と交際せられたことのみである。鐵翁は長崎の春徳寺の僧で、有名な南宗畫家であつて、祖門と號した人、逸雲は名は相宰字は公幸といひ、書畫を以て名を得た人である。かくて霞石は同年の六月中頃に長崎を出發して歸途に就き、船にて佐賀に渡り、陸路より小倉に出て、それから船で大阪に着し、七月京都に入り、暫く滞在して、それから木曾路を経て江戸に入り、やがて房州に歸つて來られた。

霞石の長崎遊學は醫術に於ての所得は多かつたとは思へないが、詩に於ては大に得る所があつたと思ふ。併しそれは兎に角、醫者は長崎の晝寢といふ諺もある位で、一度長崎の地を踏むだけでも世間の評判がちがふのであるから、霞石も其の後は繁昌したと見えて、佐久間村其他の村々にも出張所を設けられるに至つた。その頃が加藤家の盛運時代であつたらしい。随つて財政も餘裕が出來たの

で、地方遊歴の文人達にも相當に世話をすることが出来た。かの有名な詩宗梁川星巖が妻紅蘭女史を携へて來遊したのは天保十二年六月のことで、星巖は八九日間滞在してゐた。越えて弘化四年十月には、九州の女流詩人原采蘋女史が來て、數日滞在したこともある。此の時霞石は四十六歳女史は五十歳であつた。其の頃は江戸の文化の爛熟時代であつたから、文人墨客の數も多く、生活難もあつたと見えて、多くは地方遊歴をしたものである。それらの人は房州に入ると、先づ霞石の家を訪うて厄介になつた。かの醉死道人竹内雲濤の如きも隨分厄介をかけた方であつた。

霞石は書に於ては行草を得意とした。而して其の名も相當に知られてゐたので、江戸の筆舗高木壽穎は霞石先生用筆の銘を打つて賣り出した。かの嘉永三年三月に武田石翁の建てた館野村孝子塚の碑は霞石の書である。斯の如く、霞石は書道に於ても、當時房州に於て盛名を馳せてゐた。而して醫術に於ても、多年の經驗から立派な腕になつて居られたので、其の名は江戸にも知られ、援引する向も少くなかつた。そこで、霞石は家業を二男立章に譲り、自分は江戸に出て茅場町に寓居し、帷を下ろして教授し、又診療に従事せられる事となつた。それは嘉永四年五十歳の時であつた。(長男三圭は之より先天保十二年十一月十八日)。而して翌五年には、同じ茅場町に家を買つて住居を定められた。此處に於ても本業は醫術であつたが、併しそれよりも文藝方面に活躍せられることが多かつたやうである。其の頃の交友には大沼枕山、横山湖山(後に小野)、生方鼎齋、鷺津毅堂、藤森天山、鹽谷岩陰、大槻磐溪、川田麴江

等多士濟々であつた。霞石は是等の名士と交り、唱和徵逐おほむね虚日なしであつた。その間に霞石の名は江戸に於ても高くなつたので、伊勢の長島侯増山河内守正修(二萬石)に招かれた。それは勿論醫員としてであつて、江戸の藩邸(麹町區八代洲河岸)に仕へられたのである。而して住宅は元のまゝ茅場町の自宅であつて、傍ら一般の診療にも従事せられたらしい。何はともあれ、之は名譽のことであるから満足されたことと思ふが、一年を隔て、安政二年正月二十日には、不幸にも妻内木氏が歿せられた。此の時霞石は五十四歳であつた。

妻の歿した後は、獨りで寂しく暮されたが、天性淡泊であつて、且多方面の趣味があつたから、左までに寂寥を感じられなかつたであらう。而して文久元年六十歳の時から、若山勿堂(フツ)の門に入つて經書の研究を始められた。勿堂は美濃出身の人で、佐藤一齋の高弟である。此の時六十歳であつたから、師弟同年といふわけで、霞石は左の一詩を賦してゐる。

人生六十暗中行 不假雪螢爭得明 縱受他嘲一也何厭 朝聞夕死是吾情

霞石の趣味は多方面に亘つてゐたが、其の中でも石を愛するといふ珍らしい趣味があつた。曾て一奇石を平群村なる名山伊豫ヶ嶽の下で獲られた。その形が伊豫ヶ嶽に克く似てゐるから、之を小豫山と名づけて愛翫せられてゐた。其の後友人大槻磐溪が之を見て、赤城霞と命名せられた。霞石は大いに喜んで、自ら其の名に因(ちな)んで霞石と號することゝした。之が號の由つて來る所である。而して霞石

は廣く知友に請ひ、此の石の贊詞を得て、集めて『品石風雅』と題し、慶應二年に出版せられた。

とかくする間に、世の中は一變して明治戊辰の戦争となつたので、一時難を避けて郷里に歸られた。併し間もなく世も静まつたので、再び東京に出られたが、世態は全く變化し、知友の文人雅客も多く凋落したので、明治三年の頃、全く東京を引拂つて歸郷せられ、川田麴江の撰文に成つた生壙碑を北條町八幡神社の境内に建てなどせられた。此の時臨終の詞までも作られた。

石丈生前友 顛狂夢一場 黄泉誰識我 獨有_二米襄陽_一

やがて中風症に罹つて起居の自由を失はれ、遂に明治六年四月一日(實_一三月三十一日)行年七十二歳で歿せられた。法號は鑑定院熟道世美居士、墓は平群村平久里中の舊宅の傍にある。二男玄章家を嗣いで醫を業とし、又文學を好み、詩文に長じてゐた。此の人の妻は鱸松塘の妹(道_一女)である。玄章は明治十五年七月に歿した。其の子淳造は嗣いで醫を業とし、又衆議院議員に選ばれたが、大正三年十月に歿した。其の子章氏家を嗣いだ、今は清章といひ、高野山光明院に住せられてゐる。又其の次弟有晋氏は豊房村山萩の福樂寺の住職である。

堀江顯齋

堀江顯齋名は是顯、字は仲益、通稱を太左衛門といひ、顯齋は其の號である。東條村和泉の人で、文化二年乙丑の出生である、が幼名は不明である。此の家は代々太左衛門を襲名してゐるので、顯齋の父も太左衛門といひ、村の名主を勤め、農業に従事してゐた。幼少の時から、堀江家の菩提所たる東條郷西村の龍泉寺の住職天塚台翁和尚に就て漢籍を學ばれた。此の和尚は非常に學識のあつた高僧であつたといふことである。顯齋は資性篤實温厚の人であつて、學問好きであつた。父は顯齋の十三歳の時に歿したので、其の後は顯齋が家を、嗣ぎ年と共に家業を勵み、暇ある時は龍泉寺の和尚にも學ばれたが、多くは獨りで和漢の書を何くれとなく讀破せられた、而して又一方には、數學の方面に多大の興味を持たれ、遂に二十六歳の頃即ち文政十二年か天保元年の頃に江戸へ出て、關孝和七傳の算學者長谷川礒溪に就て學ばれた。礒溪は名を弘字を子通といひ、通稱は善左衛門といつた人で、仙台領佐沼(今宮城縣佐沼町)附近の人で、本姓は佐藤、幼名秋三郎といつたが、江戸に出て長谷川西礒(名は寛、通稱善左衛門)の弟子となり。遂に養子となつて、二代目善左衛門となつた人である。父子共に算學に深く、且つ教授に長じてゐたので、當時門生の多いことでは江戸でも第一といはれた大家であつた。顯齋が

磻溪の門に入ったのについては、淺からぬ縁故がある。それは顯齋と同村の和泉から、鈴木利八といふ人が江戸に出て、日本橋一石橋附近で理髮業を営み、大九床と稱し、理髮業の取締をしてゐた人がある。其の人の子は治兵衛重昌といひ、數學を好み、長谷川磻溪の門に入つて學んでゐた。故に顯齋は、此の利八父子の世話で入門したのである。治兵衛重昌は、後に祖母の郷里なる君津郡貞元村に住し、當時地方に稀なる算學者として知られてゐた。とにかく顯齋は、此の人達の手引で磻溪の門に入り、四五年の間修學せられたらしいのである。故に房州へ歸へられたのは、天保四五年の頃で、年齢は三十歳位であつたと思ふ。

顯齋が、長谷川磻溪の門に入つた年代については、なほ考ふべき餘地があるので、一言して置きたいと思ふ。磻溪は養母と折合が悪かつたので、天保三年乃至五年の頃に、九州柳川に行つて、天保十年に江戸へ歸つた。故に顯齋が就いて學んだのは天保三五年以前か、天保十年以後かでないければならぬ。そこで編者は前説をとつて、天保四五年まで就いて學んだものと推定したのである。併し或は後説の如く、天保十年以後であつたかも知れない。すると顯齋は、三十五歳から江戸に出て學んだことになるので、歸郷したのは三十七八歳でもあつたと思はれる。勿論長くは遊學してゐなかつたに相違ない。若し果して然りとすれば、顯齋は、歸郷後は凡そ十年ばかりで歿したことになる。両説何れが事實であるかは判定しがたい。後の調査研究に俟つ。

その後は、家に在つて農業の傍ら、子弟に和漢の學や算學を教授せられたが、就中算學が最も得意であり、地方としても教授者の少い方面であつたから、殆ど門生は算學の門人であつたと思はれる。當時貝渚村(今鴨川町貝渚)に、八幡屋半兵衛といふ人があつて、相當に算學の出來た人であつたが、顯齋との間に交際があつたか無かつたかは不明である。なほ其の頃今の九重村清水に福原宗吉(或は莊五郎)高見桂藏(福原宗吉の門人)といふ算學者があつて、門生も相當にあつたといふことである。とにかく、房州に於て名のある算學者は、三四人に過ぎなかつたので、顯齋の門に集つて來た門生も、相當に多かつたと思はれる。今和泉の堀江氏の屋敷内に建つてゐる墓碑は、それらの門生の建てたものである。併し顯齋の算學が、如何程の程度まで研究せられてゐたものか、今日では其の著書も記録もないので、知りがたいのは遺憾である。『佐殿草創記』卷末の出版豫告には『算學雜記』二冊近刻とあるけれど、佐殿草創記すら未刊のまゝで顯齋は歿したので、無論算學雜記も未刊のまゝであつたが、其の原稿も今は散佚して見ることが出來ないのである。

さて顯齋は、前述の如く算學者として、房州唯一ではないにせよ、數の少い算學者中の一人として、有力な人であつたことは事實である。併し顯齋は、又一方に於て、郷土史研究の一人者であつたことは注目すべきことである。顯齋は、和漢の學に相當の造詣はあつたと見えるが、其の中でも、國文の方に多く力を注がれたらしく、其の結果として郷土の史跡を研究せられたのである。その愛讀さ

れた書物は、明確には知りたがたいけれど、『平家物語』『源平盛衰記』『義經記』『前太平記』『東鑑』の類は、愛讀書の一部分であつたらしい。それからして、房州と頼朝との關係に思ひつかれて、房州に於ける頼朝の遺跡や傳説を研究せられた結果が一部の『佐殿草創記』十卷となつたのである。此の書は頼朝の擧兵に筆を起し、石橋山の敗戦から、房州に逃げて來て、約二週間房州各地を巡行したことを、主として書いたもので、鎌倉開府の頃までを叙してゐるのである。その最も力を入れて書かれてゐるのは、第七卷であつて、房州に於ける頼朝の行動を詳しく書かれてゐる。それは『東鑑』『源平盛衰記』『義經記』等の記事を主として。それを土地の史跡傳説に據つて、考證叙述したものである。今から見れば、多少いかゞはしい点もあるけれど、其の當時に於ける研究としては、大いに見えるべきものである。此の書は何年に起稿せられたか不明であるが、脱稿したのは天保十一年である。而して今堀江家に保存せられてゐる稿本は、其のまゝ印刷することの出来るやうに、淨書されたもので、顯齋自筆のものである。なほ顯齋は、此の書の外に『蓮祖舊跡志』二卷を著されてゐる。此の書は弘化二年六月に脱稿し、直に出版されたもので、房州に於ける日蓮の遺跡を取調べ、婦女幼童にもわかりやすく、假名交り文で書かれたものである。『佐殿草創記』も同じく假名交りで、文体は流暢に面白く書かれてある。なほ『佐殿草創記』の卷末の出版豫告によれば、『算學雜記』二冊、『韻學雜記』一冊、『越路のしをり』一冊各近刻と書かれてゐる。併し是等の書は、いづれも未刊のまゝであ

つて、今日はその原稿すら散佚して見ることが出来ないのは、惜しむべきことである。殊に『算學雜記』や『韻學雜記』の散佚は、最も惜むべきである。顯齋は音韻學に於ても、相當の造詣があつたものと見える。又『越路のしをり』の著がある所を見れば、越後地方へ旅行せられたこともあつたと見えるが、何年のことか全く不明である。なほまた顯齋は、上總國の中村國香の著された『房總遊覽誌』卷一安房の部に、補訂を加へられた。それは蓮祖舊跡誌脱稿と同時にあつて、弘化二年の夏である。

以上述ぶる所によつて、顯齋の業績は、大体に知ることが出来ると思ふ。傳ふる所によれば、此の人は平常餘り外出せず、一室に居つて本を讀んだり、算學を研究したり、或は著述をしたりして居られたさうである。其のために健康を害せられたと見え、行年僅に四十六歳で、嘉永三年七月二十九日に歿せられた。法名を顯齋數學元量居士といひ、墓は東條村和泉の堀江氏屋敷の内にある。碑は門人が其の翌年即ち嘉永四年の三月に建てたもので、略傳の外に左の辭世の歌が刻せられてゐる。

遁れむとかねて思ひし道芝の露には月のすまざらめやは

因にいふ、顯齋は和歌も詠まれたといふことで、詠草の如きもあつたらしいが、今は何物も遺つてゐないといふことである。顯齋の相續者は庄一郎といひ、此の人も算學や漢學などを教授せられ、俳句をも作られたが、明治十一年十一月九日に歿し、當主倉吉氏は、他から養氏に來た人で、今昭和十

年に七十八歳である。

恩田 仰嶽

恩田仰嶽名は利器字は大用といひ、仰嶽はその號である。幼名は爲、後に恭太郎といひ、又豹太と改め、致仕の後に豹隱と稱した。文化六年(昭和十年からは百二十六年前)八月二日駿河國田中(今静岡縣志太郡西益津村田中)に生れ父は新五右衛門利久といひ、母は成瀬氏である。恩田氏は昔の吾妻七騎の一で、世々上野恩田村(今群馬縣馬縣根村恩田)に住んでゐたが、越前守能定の時に、上杉謙信に仕へ、川中島の戰に功を立てた。その子孫は上野國沼田の城主眞田氏(昌幸、信幸、信吉、信澄)に仕へてゐたが、天保元年眞田伊賀守信澄が改易となつたので、浪人になつて民間に下つた。然るに享保十四年に至り、恩田庄兵衛利忠は沼田城主本多豊前守正矩に召抱へられ、翌享保十五年九月豊前守が駿河の田中へ轉封せられた時、隨つて田中に徙り、其の後四代を歴て、仰嶽の父利久に至つたのである。

仰嶽は幼にして、卓犖不羈、穎悟人に絶してゐた。七歳から藩の儒者石井繩齋に就いて學ばれたが、學問に於て拔群であつたと同時に、惡戯も可なりに猛烈であつたらしい。或は蛇を捕へて之を玩弄したり、或は繩を城濠の橋畔に引いて、警火吏石川某を渚中に陥れたりせられた逸話がある。併し

繩齋は其の膽略を感歎して「本藩には軍學の師がないが、若し此の子に兵法を學ばせたならば、必ず大用をなす人物となるであらう」と謂はれたさうである。而して名(利器)と字(大用)とを撰んで與へられ、又父の利久にも屢江戸へ遊學させることを勸告せられた。父も勿論それを望んで居られたので、文政九年仰嶽の十九歳の時に、藩主正意公に請うて、軍學修業の爲に、三ヶ年江戸遊學の許可を受けられた。そこで仰嶽は六月五日に江戸へ向つて出發し、途中伊豆下田の親戚片岡氏を訪ふとて、夜天城山を通られた。險崖の山道月暗くして、狼さへ吠えてゐる間を、折節痲病で吐瀉しつゝも、氣力少しも撓まずして、遂に黎明に片岡氏の家に達せられたといふことである。それから海を航して江戸に達せられた。當時江戸には軍學者も多くあつて、甲州流越後流を始め、山鹿流などの諸流、いづれも門戸を張つてゐたが、感心の出来るやうな學者はなかつたので、仰嶽は遂に市川梅嶺の門に入つて、長沼流の兵學を修められることゝなつた。梅嶺は柴野栗山の門人で、儒學に於て有名な人である。仰嶽は此の師に従ひ發憤して勉學せられたので、忽ち秀才を以て目せられ、同門の細井謙次郎と並べて雙壁と稱せられた。併し之に満足せず、一方には、昌平齋に入り、佐藤一齋、松崎懺堂、古賀侗庵等の碩學に師事せられた。此の間に三ヶ年の期限が盡きたので、再び三ヶ年の遊學許可を得られたが、藩からの手當は年に二人扶持(米で九俵)であつたから(後に三人扶持となつたが)生活費に窮乏して、頗る苦學せられた。時には虛無僧の眞似して尺八を吹いて市中を賣ひ歩きもせられたといふことである。而して同學の友

人には、丹後の野田笛浦、大和の森出節齋、江戸の川西函洲等があつた。かくて仰嶽は、前後六年の研究によつて兵學も儒學も、造詣頗る深く、遂に天保四年四月には軍學の印可を受けられたので、之を機として田中へ歸られた。

藩に於ては直に軍學帥範を命じた。之から仰嶽は、一藩の軍學指導から軍制改革の事までも關與せられることゝなつた。翌天保五年十月父利久は隱居して、仰嶽は家督を相續し、尋いで御使番となり、日知館目付を兼ねられた。之より藩學の風蕭然として改まつたといふことである。かくて天保十四年には長柄奉行となり祿五十石を給せられ、弘化三年には御者頭となり六十石、弘化三年には寺社奉行を兼ねられた。偶々嘉永六年六月ペルリの來た時には、藩主正寛公の命を奉じて、田中から二晝夜で江戸に達し、直に海防の任務に當られ、浦賀神奈川の間を往來し、外夷の事情を察して機宜の處置を取られた。藩主は大に之を感賞せられ、翌安政元年正月には大目付格に昇せ、六月六日には葵御紋付の陣羽織を授けられた。

かくの如く仰嶽の仕路は順調に進んで來た。然るに同年十一月三日には(辰の刻即ち午前八時頃)東海道は大地震で、家屋の倒潰、人畜の死傷多く、田中城も破損し、藩士の住宅も無事なものは少なかつた。此の時仰嶽の父利久は、中風症で臥床中の處、漸く家人に助けられ庭上に避難せられたが、そのために療養も十分手が届かず、遂に十月十日に歿せられた。行年七十四であつた。仰嶽の哀傷は一通りでは

なく、人皆その孝心に感動したといふことである。

之より先き藩に於ては、幕命もあり、且時勢にも見る所あつて、兵備の充實を圖り、或は武具の修理新調に、或は銃砲の製造に、多大の費用を要した。其の上奢侈の風も増長したので、藩の財政は窮乏を告ぐるに至つた。藩主は之を憂ひ、遍く藩士の意見を徵せられた。その時仰嶽は數條の策を具申せられたところ、大いに嘉納せられ、安政四年十月拔擢せられて、近習頭格となり、江戸田中兩方の御勝手頭を命ぜられ、且郡奉行勘定奉行は元の如く勤められることゝなつた。そこで仰嶽も恩遇に感じ鋭意その職責を盡された。此の時に當り幕府は頻りに軍制の改革を斷行し、諸藩に於ても其の旨を奉じて、洋式銃砲の訓練を勵行するに至つた。田中藩でも勿論のことであつた。殊に萬延元年二月藩主正寛公卒去せられ、正訥公(紀伊守)が襲封せられると、益々之を勵行せられ、仰嶽は翌文久元年正月番頭となり祿百石を給せられた。元來仰嶽は西洋風を好む人ではなかつたが、時勢上洋式の採用も已むこと能はざるものと信じて居られたので、自分も進んで西洋兵術の書を読み相當に深く研究せられた。而して自ら先に立つて、訓練の任にも當られた。併し藩士の多數は之に對して反感を懷き、大不平であつたから、仰嶽に對する謗議は百出して、時には身邊の危険なこともあつた。それでも仰嶽は平然として省みなかつた。

慶應二年藩主が、駿府城代となられた時、仰嶽は擧げられて參政となり、駿府城の防備及び緩急に

應ずる策などを講ぜられた。然るに天下の形勢は急轉直下して、翌慶應三年十月には徳川氏の大政奉還となり、明治元年には戊辰の役から江戸城明渡しとなるまで、實に忽忙を極めた。其の間仰嶽は駿府と田中との守備に盡力せられたが、かの大總督府が駿府に駐屯せられた時、官軍の參謀西郷隆盛は、干戈倥偬の際にも拘はらず、一日仰嶽を訪うて兵法を問うたことがあると傳へられてゐる。事の實否はとにかく面白い逸話である。さても時勢は急轉して明治維新の世となつた。而して徳川家は田安公子(名は龜之助、即ち今の徳川家達公)を以て相續せしめられ、駿府に於て七十萬石を賜はつたので、駿遠の諸侯は他へ轉封せしめられた。その時田中藩は房州に於て四萬石を賜はることとなつた(九月二日)。そこで仰嶽は藩命を受け算學者古谷道生を率ゐて、先づ房州に來り白濱村の地を相して城郭を築くこととなつた。之を長尾城と稱した。然るに此の地は海岸であつて風の當りが強く、建築半にして倒潰したので、謗議が起り、他に地を變更して建てるといふ説も出て、遂に折角仰嶽の苦心せられた長尾城の築造も中止になり、仰嶽は譴を蒙つて致仕せられることとなつた。その時日は明確には知りたが、明治三年中のことで年齢は六十二歳の頃であらうと思ふ(藩では改めて北條鶴が谷の地に陣屋を設けられた)。

是に於て仰嶽は、全く仕途に望みを絶ち、退いて白濱村の熊野神社の傍に隱居し、豹隱と稱して(それまでの名は豹太)子弟を教授せられた。爾來二十餘年、教授の餘暇には、香を焼き茶を煮、或は釣を垂れ、花鳥を友として、悠々自適せられた。而して著述は壯歲より着手せられ、晩年に至るも筆を執られた

ので、其の稿本は等身に達する程である。その中の主要なるものを舉げて見ると『周易傳義叢測』十六卷、『左傳杜解鈔說』十六卷、『大學章句翼』二卷、『孟子集註翼』十四卷、『孫子纂註』三卷、『南朝紀事本末』二卷、『握奇集解』一卷、『鷄肋雜誌』十卷等である。その他『拳旗燈』『講武津梁』『示彪書』『垂綸腹語』等がある。而して是等の稿本は大休恩田家に保存せられてゐる。又門人の數は幾人あつたものか、名簿とてないので知りたが、駿河以來の門人を合せたら、千餘人に上ることと思ふ。仰嶽は体格偉大強健の方で且つ衛生に注意せられたから、八十三歳の長壽を保たれ、明治二十四年一月廿八日、殆ど何の病苦もなく、泰然端座して瞑目せられた。葬儀は神式を以て行はれ、思田豹隱藤原利器彦命と謚せられた。墓は杖珠院の墓地にある。内室は田中氏、三男二女を擧げられたが、一男利武の外は早世せられた。利武は城山と號し、箕裘を繼ぎ、子弟を教授せられた。大正八年一月四日歿す行年八十二。男利用氏は名を彪といひ、長く教育に従事せられたが、今は退隱して白濱に住せられてゐる。

野呂道庵

野呂道庵名は俊、字は民父また俊臣といひ、道庵(又は同庵)はその號である。文化十年十二月七日江戸

下谷の長者町で生れた。父は名を惟省字は省吾、號を陶齋といひ、書家として門生を教へてゐた人である。野呂氏は、文徳天皇の皇子惟喬親王から出たもので、後世に至り、上野國野呂庄に住してゐたから、野呂を以て氏としたといふ。後故あつて伊勢の笹山城に移つたが、道庵の祖父隆房の時に、江戸へ移り、神田の大和町に住せられた。此の人には男子がなく、一人の娘があつた。それが道庵の母であつて、父の陶齋は武州南埼玉郡越ヶ谷の郷士の家から掎養子に來た人である。それから下谷の長者町へ轉居せられたらしい。父の陶齋は、龜田鵬齋の門人であつて、道庵もまた幼少から鵬齋に就いて學ばれた。それは十四歳までのことである。鵬齋は道庵の十四歳の春即ち文政九年の三月九日に、七十五歳で歿したのである。その後は鵬齋の養嗣子綾瀬に就いて學ばれたこともあるが、それは三年間位であつたといふことである。とにかく道庵は、もはや十四歳の時には、成人も及ばぬほどの學問が出來てゐたので、備前岡山の藩主池田齊敏（なりとし）の辟（めし）に應じて、月次の講義に出席された。その時には、藩主も諸士を率ゐて聽講せられたといふことである。かくの如く道庵は、十四歳の時に恩師鵬齋先生に別れられたのであるが、よほど氣に入つたと見えて、鵬齋の使用せられた見臺や湯呑茶碗などを譲られたさうである。或は綾瀬から譲られたともいふことであるが、いづれにもせよ、鵬齋綾瀬二先生と關係の深かつたことは事實である（その見臺及び湯呑茶碗は、後に道庵から保田町の門人早川儀之助に譲られたものが今も同家に藏せられてゐる）。道庵の人と爲りは、明敏にして學を好み、謹厚篤實の學者であつたが、また勇氣膽力があり、加ふ

るに狀貌魁偉にして威嚴があつた。曾て十六歳の時、文政十一年のことであるが、父陶齋は某氏の招きに應じて幸手驛（今埼玉縣北葛飾郡幸手町）に赴かれ、塾生も皆隨行したので、道庵は母と共に留守して居られた。道庵は例の如く、夜半までも讀書してから、寢に就かれたところ、やがて三人の盜賊が押入り、道庵の枕元に置いてあつた一刀を取つて、母堂の室に入り、之を抜いて脅迫してゐた。物音に驚いて道庵は目をさまし、蹶起して、賊から刀を奪ひ取り一賊を斫りつけたので、二賊は狼狽して逃げ去つた。斫られた賊は門（かど）の門（かど）に突きあたつて倒れたのを、道庵は追撃して止めを刺さうとせられたが、母堂の諫めによつて止められたといふことである。之を見ても、膽勇の人であつたことがわかるのである。

道庵の學統は、鵬齋を承けてゐるから、折衷派である。而も訓詁考證の弊に陥らず。明確なる經義に徹することを主とせられた。また詩を能くし、書道に於ても、父陶齋の庭訓を受けて、優に一家の風格をそなへられてゐた。やがて追ひ／＼に道庵の名が高くなつたので、諸侯から頻りに招聘せられたが、皆之を辞退せられた。而して翌文政十二年の春（十七歳）から、駒込吉祥寺學寮の請ひに應じて、僧徒に教授せられた。従つて學ぶ者六百餘人であつたといふことである。かくて三年の後、天保三年の頃に至り、父と住居を別にして、新に家塾を下谷徒士町に開かれた。すると入門者は頗る多く、殊に伊豫國大洲の藩主加藤遠江守泰幹（やすもと）の邸が附近にあつたので、藩士が多く來り學んだ。藩主は遂に道

庵を聘して、藩校の督學とし、講義の日には、藩主も聽講せられた。而して藩主泰幹は、自ら詩文も作られたが、添削は悉く道庵の手にかゝつたものである。その後十五年ばかりの間即ち天保四年から嘉永元年までの間のことは、何等の記すべきこともないが、嘉永二年三十七歳の時に、四月から出發して、信越地方を漫遊せられ、翌年七月に歸られたことがある。その頃から房州加知山藩士の入門するものが多かつた。それは加知山藩邸が、遠からぬ下谷の廣小路に在つたからである。而して藩主酒井大和守忠嗣は、月次の定日に道庵を藩邸に迎へて、家臣のために教授せしめられた。その時には自らも聽講せられた。かくて文久元年十二月に至り月俸若干を給せられ、賓師の禮を以て遇せられることゝなつた。是に於て加知山藩士は悉く其の門に入つたのである。時に道庵は四十九歳であつた。

その頃幕府に於ては、學政更張の議が起つて、文久二年十二月芳野金陵を擧げて、昌平黌の儒員として其の任に當らしめた。そこで金陵は、小學校を江戸の府下數十個所に設け、旗下の士及び庶民を教育せんことを建議せられた(金陵は下總の人で駿河國田中の本多侯の藩學日知館の督學であつた。田中藩は後に房州長尾に轉封された)。幕府では先づ江戸の内に四校を設けることゝなつた。それは文久三年頃のことであつた。その時金陵は道庵の家塾を以て假校とし、道庵を校長に任ずるの内意を傳へた。然るに此の小學を設ける法令は發布せられたのみで、實施は中止せられたので、折角の良法も畫餅に歸した。とかくする間に、幕末多事の世の中となつて來て、明治元年三月には、官軍の東下となり、江戸は將に戰亂の巷とならうとしたので、道庵は

亂を避けて房州勝山に來られた。かくて間もなく、江戸も鎮靜に歸し、帝都となつて、明治政府も定まつたので、加知山藩士も追ひ／＼に勝山に引上げて來て、再び道庵に學ぶことゝなつた。時の藩主酒井忠美は、明治二年六月加知山藩知事に任ぜられ、藩校を設けて道庵を講師とせられたが、明治四年七月十四日廢藩になつたので、藩校も從つて廢せられた。併し政府に於ては、同七月十八日に文部省を設け、學事を獎勵することゝなり、舊に沿ひ學校を建てよといふことになつたので、道庵は舊藩廳を以て假校舍に充て、門人數名を教員として授業を開始せられた。間もなく翌明治五年八月三日には學制が頒布せられ、各町村に於て小學校を設け、遍く士民の子弟を教育することゝなつた。その時は道庵の門人が多く教員に採用せられた。又道庵は地方の人に、中學程度の教育の必要なることを感ぜられ、明治七年七月二十七日に、明善義塾を開かれた。その塾舎は、勝山町に在つて、もとは醫師加藤立通の住宅であつた。入學者は多く近村の青少年であつたが、生徒名簿も遺つてゐないので、人數氏名は不明である。併し道庵が江戸開塾以來、一代の間に教へられた門人は、千を以て數へるほどの多數であつたことゝ思ふ。かくて明治十五年には、門人等が相謀つて壽碑を建てた。篆額は右大臣從一位大勳位岩倉具視公、撰文は宮内省出仕川田剛、書は内閣大書記官金井之恭であつて、その碑は現に加知山神社の境内に建てられてゐる。

道庵は、文よりも詩に長じてゐた。併し別に詩集とてもなく、今日ではその一斑を見ることすら困

難である。たゞ門人知己などに書いて與へられた書幅などが、遺つてゐるに過ぎない。その中で道庵の最も得意の詩は左の七絶であるといふことである。

男子生不_レ爲_二封侯_一 寧臨_二江湖_一浮_二扁舟_一 浮沈隨_レ波君勿_レ怪 前身東海一閑翁

道庵は又謹嚴の裡に、一味洒落の風流があつたので、時には狂歌の作もあつた。その一例には、江戸某處の臥龍梅を詠ぜられた左の一首がある。

玄徳が尋ね來て見りや臥龍梅

かんを(羽)よくして銚子(張)もて來い

道庵は強度の近視眼であつた。酒は少量であつたが茶と煙草とを、最も嗜好せられた。著述は相當にあつたといふことであるが、今日は殆ど一冊も残つてゐないのが遺憾である。

道庵の歿せられたのは、明治二十二年二月二日であつて、行年七十七歳であつた。墓は勝山町下佐久間の天寧寺にある。法名は道庵院呂俊明善居士といふ。長子僕臣は東京醫科大學に學び、下佐久間の板ヶ谷に於て、醫業に従事せられたが、昭和六年一月十九日に歿し、其の子秀男氏が相續して今東京に住せられてゐる。

鳥山確齋

鳥山確齋名は正清、通稱は新三郎といひ、確齋はその號であるが、又別に義所、冢峰、蒼龍軒、關以東生等の號も用ひられた。七浦村大川の人で、文政二年(昭和十年から)二月二日の出生である。父は宇山孫兵衛正實といひ、母は岩城氏(名は喜利)であつた。幼名は貞(さだ)二といひ、長じて禎二郎と改められた。その後鳥山新三郎と改められたのは、嘉永三四年の頃で、年齢三十二三歳の時である。宇山氏は新田氏の一族里見氏から分れたもので、本姓は鳥山氏であるから、確齋は復姓せられたのである(實家は今に宇山氏であ)。さて確齋は七歳の頃から十四五歳まで、同七浦村大川の大聖院の住職法印盛俣(假名)に就いて讀書習字等を學ばれた。而して八歳の頃、友達の風(たか)を揚げてゐるのを見て居られたところ、不意に風が飛んで來て左眼に突きあたり、傷を受けられたのが原因で、遂に左眼は殆ど失明せられた。後年獨眼龍の綽號を得られたのも其のためである。それから餘り友達とも遊ばれず、獨で繪本や草雙紙などを見て遊ばれたといふことである。而して十六歳の時に、家系を覽て、源氏の嫡流勤王の名族新田氏の支流なることを知り、之より文武を修めて家を興さうといふ志を立てられ、其の後は和漢の書を手に入るがまゝに讀破せられ、稗史小説の類までも廣く讀まれた。又一方に於ては劍道を修められ、偶

々遊歴して來た劍客淺田五郎作(有名なる千葉周作の高弟)に就いて、兄熊吉(後に古三郎といひ、又孫兵衛正義ともいふ)と共に學ばれたといふことである。かくて天保九年二十歳の時に至り、笈を負うて江戸に出で、お玉が池の東條一堂先生の門に入學せられた。一堂は上總國はらよ埴生郡八幡村(今長生郡五郷村八幡)の人で、當時江戸に於ては折衷學派の泰斗として仰がれた人である。確齋は其門に在ること凡そ十年間であつた。而して三十歳の頃即ち嘉永元年の頃に至り、江戸京橋の桶町に塾を開いて子弟に教授せられることゝなつた(半井氏の義所は、二十八歳の時からとあるが、實は三十歳の時からである)。かくて塾は開かれたが、最初から名の聞こえる筈もないので、入門者は少なかつた。併し名聞利欲に淡泊な確齋は、却て之を幸ひとして自分の勉強をせられたらしい。即ち出羽國庄内藩の兵學家で、當時浪人してゐた加藤瑞園(名は景淳、字は淳卿、別號環龜、通稱昇三郎)に就いて上杉要門流の兵學を學ばれた。而して凡そ一年半ばかりで、嘉永三年三月十三日免許皆傳を受け、權征軍師の稱號を用ゐることを許された。時に三十二歳であつた。確齋はなほ其の他に甲州流を始め、山鹿流、北條流などの兵學にも相當の研究を積まれた。故に確齋は、儒者ではあるが、寧ろ得意は兵學であつたやうである。而して確齋は此の頃(嘉永三年の秋冬から嘉永四年の春までの間)感ずる所があつて、姓を鳥山の舊姓に復し、名を新三郎と改められた。それは暗に勤王の志士を以て自ら任ずる心持があつたからである。斯の如く桶町の塾(蒼龍軒)は、普通の門生は少なかつたが、併し其の代りに、塾主確齋の人物を慕ひ、尊王憂國の至誠に共鳴してゐる所の天下の志士が、此處に集まつて來た。是等の志士中最も夙く相知

つたのは、南部盛岡出身で東條門下の江楮五郎(後に那珂梧樓、通高といふ)であつた。つゞいて水戸の櫻任藏や、長州の土屋彌之助などが來るやうになり、又土屋の紹介で吉田松陰、桂小五郎、來原良藏等の一味が來るやうになつた。又熊本の宮部鼎藏や永島三平等も來り、後には梅田雲濱も來たことがある。かくて桶町の塾は宛然志士の合宿所となり、梁山泊の名を以て稱せらるゝに至つた。さて多くの志士の中で、最も確齋と意氣投合してゐたものは吉田松陰であつた。松陰の初めて桶町へ來たのは、嘉永四年四月頃のことであるが、松陰は同年十二月長州藩邸を亡命して、宮部鼎藏と共に東北遊歴の途に上つた。此の時確齋は常陸の下妻まで送つた行かれた。かくて松陰は會津新潟佐渡秋田弘前森岡仙臺等を巡遊して、翌嘉永五年四月江戸に歸るや、直に桶町なる確齋の家に投宿した。之は松陰が先に藩邸を亡命した爲に藩邸へは歸ることが出來ないからである。此の後松陰は江戸に居る時は、殆ど確齋の家を寓居としてゐたのである。それはとにかく松陰は、やがて同藩の知己の斡旋によつて、一先づ藩邸に歸り待罪して居ることゝなつたが、藩主も深くは其の罪を咎められず、長州萩に歸つて謹慎して居るやうに命ぜられた。

松陰が萩へ歸つて行つたと同時頃に、入り代つて江楮五郎が東北から歸つて來て、桶町の家に寓することゝなつた。江楮は前年十二月に兄の仇を討つといふので、かの松陰等が東北へ出發した時に、仙臺まで同行したのであるが、目的を達せずして歸つて來たのである。來たは來たものゝ實に落魄困

窮してゐたので、確齋は之を憐み、嘉永五年七月江幡を伴ひ、彼のために安住の地を求めてやらうとして、上野の國から下野の足利佐野の邊までも奔走して廻られた。併し適當の所もなかつたので、江幡は別れて日光方面に向ひ、確齋は江戸に歸られた。而して歸るや否や又直に發足して、久しぶりで故郷の房州へ歸省せられた。確齋は二十歳の時に、江戸へ遊學せられたが、歸省は今度が初めてであつて、正に十五年ぶりで年齢三十四歳であつた。滞在は凡そ一週間で、歸途は鎌倉を経て江戸に歸られた。

さて翌嘉永六年正月には、長州萩に謹慎してゐた松陰が赦されて、十年間諸國遊學の許可を得たので萩を出發して途中名士を訪問しつゝ、五月二十四日に江戸に入り確齋の家^に投じた。折しも六月三日には、米國のペルリが軍艦を率ゐて浦賀に來り、通交を請うたので、天下騒然として和戰の論上下に囂々たる有様になつて來た。志士は多く江戸浦賀の間に集り、而して桶町の梁山泊は是等の志士の出入で、恰も策源地の觀があつた。幕府は翌年回答する事として、一時ペルリを歸還せしめ、其の間に對策を練ることゝなつた。その頃確齋は恩師東條一堂を介して『和戰論』と『軍制改革私考』とを閣老阿部伊勢守正弘に呈した。とかくする間に翌安政元年正月になると、ペルリは再び軍艦を率ゐて神奈川沖に來り、回答を迫つた。そこで幕府は、内外の情勢己むを得ずとして、三月三日に至り和親條約を結び、その調印を了したので、ペルリは去つて伊豆の下田に碇泊した。兼てより無謀の攘夷を

非とし、寧ろ海外に遊び宇内の形勢に通じ、然る後に我が國防を充實して、眞の攘夷を決行したいものと決心してゐた吉田松陰は、此の機會に同志金子重輔（此人も桶町に寓居してゐた）と共に下田に到り、米艦に乗つて海外に赴かうとした（松陰は前年長崎に赴きロシアの軍艦に乗るつもりであつたが、その機を失して空しく江戸に歸つた）。是等の秘密については確齋に語つて同意を得たのである。かくて松陰は下田に赴いたが、ペルリに拒絶せられ、其の事遂に發覺して二人共に捕へられて江戸の獄に投ぜられた。その時確齋は諸友と謀り金を集めて獄中に贈り松陰等を慰問せられた。それやこれやの關係から、確齋も連累の嫌疑を受け、奉行所の訊問を受けられることゝなつた。事件の取調はいよゝゝ進んで、遂に九月十八日に至り裁決は下された。松陰と重輔とは共に長州藩に禁錮せられ、確齋は溝口家に預けられ蟄居すべく申渡された。此の溝口家は五千石の旗本で、確齋とは血縁のある間柄であつたから、確齋は兼てより溝口家の家來といふ名義になつてゐた。それ故に今回も預けられたのである。とにかく此の如き間柄であつたから、表面は蟄居でも、實際は寛大なもので、而も五十餘日で赦されたのである。其の後引きつゞき溝口家に仕へて家臣に教授せられた。此の間に確齋は著述などをして『國喪議』一卷、『房海私策』二卷、『桑梓兵賦』二卷、『節制略』二卷等を著はされた。

越えて安政二年八月には、母の大病と聞いて、房州に歸省せられ、暫く看病せられたが、江戸へ歸られると間もなく母は九月二十一日に歿せられた（六十歳）。確齋は溝口家に請ひ、五十日の忌引を許さ

れ、其の間に母の退善のために『鳥山家譜考』『慎終録』『安房志』等を著はされた。然るに其の頃から確齋は宿痾の咯血病が次第に重くなつて来て、翌安政三年の夏には危篤に陥り、遂に七月二十九日に三十八歳の短命を以て歿した。法名は確齋斯馨居士といひ、墓は東京駒込吉祥寺にある。墓碑は吉田松陰等の舊友の醵金に依つて建てられたものである。而して確齋の事歴は、上來述べた所によつて知られる通り、一代を通じて尊王憂國に終始せられたのであつて、實に明治維新の大業にも暗に貢獻せられた功績は多大なるものである。されば明治四十五年(大正元年)二月二十六日に至り、贈從五位の恩典に浴せられることゝなつた。確齋は終生獨身で暮したので子もなく、生家は兄孫兵衛正義の子孫が相續して現戸主は宇山瀧歳氏である。

鱸 松 塘

鱸すいぎ松塘名は元邦、字は彦之、松塘はその號である。別に東洋釣史、十髯叟堂等の號もある。文政六年(昭和十年から百十二年前)十二月國府村谷向つむかに生れた人で、父は道順といひ、眼科醫として地方に名高い人であつた。母は原氏である。鱸はもと鈴木と書いたのを、松塘が改めたのであるが、それには理由がある。それは養祖父安西三郎景益が、源頼朝の房州へ來た時に、鱸を釣つて献上したから、姓を鱸と賜は

つたのを、當時の人は文字に暗かつたから、鈴木と書いて代々用ひて來たとのことである。それを松塘が書き改めたのである。

松塘の幼時の教育は家庭に於て受けたいが、少年時代には、鋸山の下にあつた或塾に入つて學んだと傳へられてゐる。併し塾主の名も場所も不明である。傳ふる所によれば、松塘は數人の學友と共に、寄宿してゐたが、其の中での年少者であつたから、夜中便所へ行くのが怖しく、年長の友人に頼んで一緒に行つてもらつたといふことである。年長者は、松塘の記憶のよいのを頼んで、讀書の教へを受けるので、その代りとして、夜中でも起きて俱に行つてくれたさうである。とにかく松塘は、幼少から非常な秀才であつて、殊に詩に於ては全く天才であつた。詩は何歳の時から作られたか不明であるが、よほど幼少から作られたことは事實であつて、天保十年三月十七歳の時に、江戸へ出て、梁川星巖の門に入られたが、その時には既に立派な詩を作られてゐる。星巖は美濃の人で、當時は江戸に在り、玉池吟社の盟主として、一代の詩宗であり、其の妻紅蘭も女流詩人の冠冕であつた。而して其の門には多くの俊秀が集まつてゐたが、其の中で松塘は最年少者であつた。而もその詩は斬新清靈、風姿瀟洒、頗る先輩の推賞する所であつた。當時星巖の門下として有名な人々は、小野湖山、大沼枕山、岡本黄石、遠山雲如、竹田雲壽、嶺田楓江等であつて、かの加藤霞石の如きも、その一人であつた。松塘は是等の名士と交り、唱和應酬し、互に切磋琢磨して、益々造詣を深くし、風格愈々高

くなつて來た。併し松塘が星巖の門に入つたといふけれど、常に江戸に居つて學んだのではなく、多くは郷里に居つたのである。故に何年間江戸に遊學したなどいふことはない。されば、天保十一年には嶺田楓江が遊びに來たり、又翌天保十二年六月には、恩師星巖が妻紅蘭と共に、漫遊に來て、松塘の家を訪ひ、『松塘集』(松塘)の題詩二律を作られたりしたこともある。とにかく、江戸と房州とは近いので、毎年幾度も往來して、教を受けてゐたのである。而して江戸へ行けば、星巖夫妻のお供をして花見や月見をもちたり、或は諸友と會して雅遊を催したりもした。また房州の家へは、大沼枕山や竹内雲濤などの友人が屢來遊した。而して加藤霞石とは隣郷のことでもあるから、最も親しく、松塘の妹は霞石の男玄章の許に嫁したのである。

星巖は、江戸に在ること十四年にして、弘化二年六月二十日に、江戸を發して歸國の途に就いた。その時松塘は送つて美濃の國まで行き(星巖は美濃國安八郡曾根村の人である)、それから京都大阪に遊び、湊川の楠公の墓に謁して歸國せられた。往きは中山道を取り、還りは東海道であつた。越えて弘化四年の秋には、九州の詩人原采蘋女史が來り訪ひ、互に唱和した。

翌嘉永元年には、松塘は二十六歳であつた。此の年正月八日に郷里を出發して、上京の途に就き、先づ保田から船に乗つて江戸に着き、數日滞在の後、江戸を出發して東海道を西上した。二月二日京都に入り、二條木屋町の寓に星巖翁に謁し、滯京凡一ヶ月にして、中島棕隱貫名海屋等の名士を訪

ひ、大に得る所あつて歸郷せられた。此の年鷺津毅堂が來遊し、俱に野島(白濱村)に中秋の月を賞した。その後松塘は殆ど年々江戸に上つて、諸友と花を見月を賞するのが例であつた。

かくて安政三年には(三十)再び西遊を思ひ立ち、二月十九日出門、三月十五日京都に着し、星巖翁を鴨沂小隱(川端丸太町の東側)に訪ひ、八年ぶりで恩師に謁せられた。それから三月十八日京を發して、芳野山に遊ばれた。その時に作られた

青山 滿目恨難銷 陵樹花飛春寂寥
猶有殘僧守蘭若 御容挂壁說南朝

の七絶は、傑作として世に傳誦せられてゐる。それから四月の初に、再び京都に歸つて暫く滞在し、頼三樹等の名士と會ひ、やがて京を辭して東に歸られた。途中美濃の大垣に於て小原鐵心、江馬細香女史を訪はれた(星巖はその後一年を隔て、安政五年九月二日に歿した)。その後は格別の事もなく、萬延二年には蒲生斐亭、文久元年には藤森天山が來訪した位のものである。

然るに元治元年四十二歳の時、八月二十一日に妻渡邊氏が歿し、翌慶應元年五月には、長男透軒が二十二歳で歿したので、松塘は大いに力を落された。殊に透軒は秀才であつて、詩才に於ては嚴父にも優ると謂はれたほどであつたから、落膽も一入であつた(透軒名は元辰、字は孟陽、通稱を辰之助といふ。透軒遺稿二卷あり)。それから松塘は、江戸へ出る氣になつて、同年の秋頃には單身江戸に出て、寓居せられた。その場所は不明で

あるが、父道順は、當時遠州濱松の城主井上河内守正直の醫官であつて、八丁堀に住して居られたから、多分その家に同居せられたであらう。その後淺草の堀田原に家を借りて住せられた。その間大沼枕山等の同志と遊び、又門生に教授せられた。明治元年の春には下總から常陸にかけて遊歴せられたが、上野戦争の頃には、難を避けて暫く歸郷せられてゐた。それから又江戸に出て、八月出發して中山道から京都に入り、十一月二十五日には星巖翁の墓を展し、紅蘭夫人を訪ひ、十二月の末に京を立つて、翌明治二年の春に江戸へ歸られた。之れが三度目の上京であつた。

明治三年九月には、宅を淺草向柳原(淺草區向柳原町二丁目四番地)に買つて移られ、家族をも國元から呼びよせて同居せられた。それから明治二十九年頃歸國せられるまで此處に住せられた。而してその頃は名聲既に高く、山内容堂、松平春嶽、松平確堂(作州津山藩主松平齊民)等の諸公から知遇を受けられてゐた。其の後松塘は、東京に居られた間は、毎年諸方に遊歴し、地方の門人を指導せられたのであるが、それを一々書くのは、繁雜に堪へないから、その主なものを簡單に列擧すると、明治八年には東北から北海道函館(海海集)へ、同九年には越前から岐阜へ、同十一年には伊香保へ、同十五年には甲斐から信濃へ、同十六年には再び芳野山へ遊び、作州から雲州松江へ(芳雲遊稿)、同十七年には上野信濃越後中飛驒美濃(北遊存稿)、同十八年には越後へ、同十九年には越後から函館へ、同二十年には飛驒へ、同二十一年には甲州及び常陸下總へ、同二十二年には仙臺山形へ、同二十四年には信越から飛驒へ、同二十五年には

同じく信越から飛驒へ、同二十八年には信越から佐渡へと、殆ど連年寧日なく遊歴せられたのである。その足跡は九州四國を除いて、其の他は殆ど悉く歴遊せられてゐる。而して到る處門弟があつたのである。

かくて松塘は、多くの年を此の間に送られ、明治二十五年には古稀を祝されたが、追ひ／＼身體も老衰せられたので、明治二十九年頃、郷里へ歸られ、那古町川崎の地に新莊を作つて隱退せられた。而して中一年を隔て、明治三十一年十二月二十四日行年七十六歳を以て歿せられた。墓は國府村谷向の先塋の次にある。著書は殆ど全く詩集であつて、『松塘小稿』一冊、『同詩鈔』二冊、『房山樓集』五冊、『超海集』一冊、『芳雲遊稿』一冊、『北遊存稿』一冊、『房山樓遺集』四冊、『快説續々記』一冊等である。

松塘には四男四女あつた。長男透軒早世し、次男亮平が相續せられたが、後に家を出られた。三男卯三郎は群馬函館等の師範學校に奉職せられ、歿して後、其の子一六氏が相續して今東京に住してゐる。四男は早世した。女子では采蘭最も名高く、名を澤といひ、書を能くし、詩にも長じてゐたが、明治二十二年十月三十一日に歿した。四女禮は號を惠畹といひ、また文學あり、松塘の高弟小澤隆八氏に嫁し、夫妻共に東京に住してゐる。

鈴木抱山

鈴木抱山名は恭、字は克齋、抱山は其の號である。また研北、天真道人、天真觀迂人などの號をも用ひられた。幼名は森二郎といひ、家を嗣いで後は、襲名して正立（シヤウリツ）と稱せられた。天保四年（昭和十年から百〇二年）館山町中町の家に生れ、父は正儀（通稱）（正立）といひ、醫を業とし、母は行方氏である。此の鈴木氏は本姓千葉氏であつたが、里見義頼に仕へて少府監を勤めてゐた某の時に、鈴木と改姓したといふことである。此の某の子に、有名な高僧釋頼勢といふ人があつた。頼勢は徳川家康の歸依を受け、家康の御前に於て宗門の論議を行つたこともある人で、房州清澄寺を中興し、後に府中（國府村）の寶珠院に住せられた名僧である（慶安元年寂。行年七十三）。某の後凡そ八世、抱山の父正儀に至るまでの事歴は、明確に知りたがたいが代々醫を業としてゐたといふことである。正儀は昌平黌に學び、又太田錦城に從學した人で非常に多藝の人であつた。正儀には二人の男子があつて、長男は東海と號し、最も詩に長じてゐた（名は恒、字は如升、幼名才助。通稱は正立といふ。醫を業とす）。次男は即ち抱山である。

抱山は幼時から、父に就いて學ばれたが、記憶がよくて、一度聞けば、忘れなかつたといふことである。七歳の頃には、草雙紙などを耽讀せられ、太閤記ぐらゐはスラ／＼讀まれたさうである。然る

に、江戸本材木町に砂糖商を營んで居られた伯父の鈴木忠兵衛（正儀の兄）は、抱山の才を惜んで、手許に呼びよせ、商人にして身を立てさせようと考へられたので、抱山の十一歳の時（天保十）に、江戸へ呼びよせ、自分の舊主家の日本橋通二丁目砂糖屋カネシヤウ（本當の店名も店主の氏名も不明である）へ奉公に遣られた。カネシヤウの主人は、成功者であつて、店員に對しても嚴格であつた。抱山は此の店に入つて、小僧になつて勤められたが、大いに主人に愛せられたさうである。餘暇には先づ算盤を教へられたが、忽ち上達して、開平開立ぐらゐは出来るやうになり、十二三歳頃からは、漢籍に讀み耽られた。商人に青表紙は禁物だと、固く戒められたので、密かに便所の中で讀んだり、或は風呂番の火を焚く時、或は主人や番頭の供待ちの間などに、懷中に忍ばせてあつた本を出して讀んだりなどせられた。併し後には主人も、その熱心に感じて、抱山に限つて許されたさうである。想ふに抱山は、最初は子供心に商人になる心組であつたに相違ないが、天性は利欲に淡泊であつて、學問文藝の方に豊富の天才を持つてゐたので、到底銖銖の利を争ふ商人には、不適當であつた。その事は抱山自身にも悟り、主人も察したことと思ふ。故に抱山は、嘉永元年十六歳の時に、腸窒扶斯に罹つて房州へ歸られたのを機として、遂に方向を轉換せられることゝなつた。それには叔母の清野といふ人が力を盡されたらしい。

此の清野といふ人は、抱山の父正儀の妹であつて、本名は志賀といひ、夙に加藤千蔭の門に入つて歌道を學び、書を能くした人で、小笠原佐渡守（肥前國唐津藩主六萬石）に仕へて老女職をつとめ、名を清野と稱し

た人である。此の人は抱山の聰敏にして學藝に長じてゐるのを見て、養つて嗣子とする約束で、抱山を引き取り、商を止めて醫學を修めさせることゝなつた。是に於て抱山は大いに志を決し、嘉永三年正月十八歳の時に、再び江戸に出て、淺草の醫家伊東玄晁の門に入學せられた。玄晁は洋方醫家であつて、當時新進の大家であつた。抱山は此の人に從つて、安政元年七月まで滿四年七ヶ月の間修業せられ、斬新なる治療法及び種痘などの術を學ばれた。玄晁は特に抱山の才を愛して常に代診を命ぜられた。或時には代診として美濃の岐阜までも行かれたことがあるといふことである。

かくて抱山は、一通り修業も了へたので、安政元年七月歸郷せられ、八月から房州白濱村に於て開業せられた。時に二十二歳であつた。(叔母清野は同年三月十三日館山に於て病歿せられた行年五十五歳)それから滿六年六ヶ月ばかり白濱に居られたが、文久元年正月二十三日兄東海が死亡せられたので、館山に歸つて家督を相續せられたことゝなつた。東海は當時鱸松塘と並び稱せられた詩人であつたが、惜しいかな、四十一歳で歿せられた。抱山は其の跡を承けて、通稱を正立と改め、同じく醫業に従事せられた。治を乞ふ者常に門に滿ちたといふことである。明治二年二月館山藩に養生局の設けられた時、御雇醫生を命ぜられたが、僅に二年ばかりで、明治四年二月に養生局が廢せられたので、其の後は、専ら家に在つて刀圭に従事せられた。而して業務の傍には、文士騷客と交り、詩酒徵逐、唱和して樂みとせられ、又子弟に漢籍を教授せられた。もとく、抱山は、醫を以て立たれた人ではあるが、かの加藤霞石と同じく、其

の名は醫者よりも學者詩人といふ方面に於て知られたのである。殊に晩年には、多くの門人があつたので、教授の方が本職のやうになつた觀がある。而して詩人としては實に天成の詩人であつたと謂つて可い。

抱山の儒學は、父に承けたのであるから、折衷學であつたが、併し何事にも恬淡なる抱山は、格別に拘泥する所なく、經義の大綱を明確にして、時勢に對處することを主眼として説かれた。而して其の博覽強記は、常に門生を驚歎せしめた。その日常門生に向つて言はれる口癖の一つに『男子萬里ノ路ヲ往カズンバ當ニ萬卷ノ書ヲ讀ムベシ』と喝破せられたさうである。又『先生は踏臺ふみだいであるから弟子は其の踏臺だけ先生よりも高くなれ』とも言はれて、門生を激勵せられたといふ。抱山は前にも述べたやうに、資性頗る恬淡無慾、脫俗清高の人で、虛榮もなく、虛飾もなく、胸中常に光風霽月の如くであつた。故に患者の藥價も、塾生の謝禮も、持つて來れば受けられるが、持つて來なくとも、更に意に介せられることはなかつた。元來は體質蒲柳の人であつたが、晩年は肥滿せられて、短軀の容貌、恰も布袋のやうであつたといふ。而して冬は炬燵にゐながら、夏は丸裸のまゝで、門生に教へられるといふ風で、天真爛漫、少しも邊幅を飾られるといふことはなかつた。酒は量なしといふほどで、酔へば眠り、醒むれば書を読み或は詩を作られた。併し其の詩も、鼻紙のやうなものに書いて置いて、門生などに示され、其の後は紙屑籠に棄てられた。故に一代の作は、千を以て數へるほどであ

つたらうが、今日残つてゐるものは、至つて少いのである。今その中の一首を擧げて一斑を示すこととする。

六十自述

隣間可_レ易葛與_レ裘

空閑居諸六十秋

古硯揮毫嗟_二水凍_一

破窓糊紙禦_二來風_一

講經聊慕朱元晦

詩句眞慚秦少游

世事紛紜何耳順

浮雲淡々海悠々

抱山の詩は、風韻飄逸、氣品高尚、古人の風格を具へてゐる、而も目に觸るゝもの、耳に入るもの、悉く詩となるのであつて、更に苦吟の跡がない。惜いかな、其の多數の詩が、殆ど散逸し盡して、今詩集となつて残つてゐるのは、抱山自筆の『唾棄殘艸』一冊のみである。而して抱山の交際せられた詩友としては、宮澤竹堂、遠山雲如、牧野詩城等であつたといふことである。又鱸松塘とは同國人のことであるから、無論交際はあつたこと、思ふが、松塘は殆ど始終江戸に居られたので深く交る機會はなかつたらしい。なほ抱山は、俳諧俳句にも堪能であつて、奚疑庵奚疑といふ號を用ひられ、作句も相當にあつたといふことであるが、これまた書き残されたものがなく、僅に

紫陽花の宿とこたへり尼法師

がけ茶屋やちやうど雲雀と目八分

といふやうな二三句が残つてゐるのみである。

抱山が、醫業の傍に、門生を教授せられたのは、凡そ三十年近くの間である。故に其の門生の數はよほどの多數に達したものだと思ふ。而してそれ等の門生は、いづれも教育者、或は官公吏、或は地方の有力者等、各方面に有用の人材となつて貢献せられる所が多かつた。而して今日でも、なほ相當に多數の人が生存せられてゐる。(今の陸軍大將西義一氏は少年時代に館山に來て)斯の如く抱山は、殆ど一生涯を、濟生育英の事に盡され、而も清貧に安んじて天命を樂み、悠々自適の生活を送られたが、明治三十一年五月二十六日行年六十六歳で歿せられた。法名は正譽恭默至道克齋居士といひ、墓は館野村大綱の大巖院にある。抱山は長尾村瀧口福原忠右衛門二女ていを娶り、六男三女あつたが、家は長女せつが婿養子直太郎(白濱村行方兵)を迎へて相續し、今は其の子正太郎氏が當主である。

曾根靜夫

曾根靜夫は、佐久間村字奥山の人で、幼名は三農三郎といひ、弘化二年乙巳八月三日の出生である。父は良助、母は婦美といひ、靜夫は其の三男であつた。家業は代々農である。靜夫は幼にして穎悟、五歳の時に能く義太夫數段を語そらでかたつたといふことである。學問は、誰に就いて學ばれたか不

明であるが、農耕の間に附近の師に就いて學ばれたのであらう。而して特に算學は、九重村清水の算學者高見桂藏の門に入つて學ばれたので、相當に深く研修せられたらしい。而して又當時遊歴して來た北辰一刀流の劍客某に就いて、劍道を修業せられ、これまた可なりの腕になられたといふことである。此の算學と劍道との素養は靜夫の立身せられた原因の一つである。

かくて二十歳の頃までは、奥山の山村で、農耕に従事して居られたが、智略縦横、深沈にして膽力があり、てきとうぶき 個儼不羈、常に郷黨青年の牛耳を執つた居られたといふことである。然るに天下の形勢は一變して、明治の世となり、高屐弊袴の一書生が直に廟堂の高官になるといふ時勢となつて來たので、二十餘年山間に雌伏してゐた一青年靜夫は、飄然悟る所あつて、孤影蕭然短褐を着て東京に上つたのである。それは何年であつたか明確に知りたがたいけれど、明治二年頃(二十)のころであらうと思ふ。

靜夫は東京へ着くと、さしあたり生活に困つて、深川の或蕎麥屋の出前持となつて働かれた。併し之は男子の爲すべき事ではないと痛感せられたので、それから本所二葉町の醫師橋本某の書生となられた。そして追ひ／＼代診のやうな事までして居られたが、實は醫者になる志はなく、官途を望んで居られたのである。そこで一日無斷で橋本方を飛び出し、一刀を腰にして、武者修業となつて天下を漫遊しようと思はれた。品川まで行かれると、途上一人の賣卜者があつて、靜夫の人相を觀て『君には今幸運が來てゐる、他へ行くのは止めたがよい』と言はれたので、直に引返して歸つて來られ

ると、主人橋本氏が待つてゐての話に、『君の不在中に農商務省の役人が來て、今度政府で地租改正を行ふについて、先づ地方では、北條縣(美作國一圓を管す今は岡山縣なり)から試みに着手することゝなつたが、いづれ竹槍席旗ぐらゐの騒動が起るものと思ふから、どうしても膽力があつて、其の上に算筆に熟達した人物が欲しい。併し左様に三拍子揃つた人物は、官界に無いから困つてゐる。誰か適任者はなからうかとの話であつたから、それならば僕の處に居る曾根靜夫が最も適任であらうと答へて置いた。君一つの話のため奮發して行つてくれないか』とのことであつた。此の橋本氏は、自ら國士を以て任じてゐた人で、朝野の高官や志士との交際が多かつた。此の時に頼みに來た農商務省の役人は、多分岩村通俊であつたらうといふことである。

とにかく右の話聞いた靜夫は、無論大喜びで、翌日農商務省に出頭して、美作行きを快諾せられた。之れが靜夫の出世の端緒であるが、併し其の年代も月日も不明瞭である。想ふに明治五年七八月のことであらう。何となれば同年七月には、政府は地券規則を追補し(明治四年十二月東京府下に初めて地券を下附し、明治五年二月に地券下附規則)全國一般に地券を授與する旨を各地方官に督勵したことがある。その際先づ北條縣から着手したのであるが、若し北條縣で失敗すれば、全國の地租改正にも影響して、困難になるといふので政府では特に人物を擇んで充てたのである。故に當路の大官達も、皆靜夫の手腕に多大の期待を懸けられてゐた。その時西園寺公望公は、左の如き詩を賦して贈られた。



送曾根靜夫君之_二作州_一

折_二取天桂_一姓字馨

飛帆千里向_二山陽_一

別時握手慇懃語

應_レ有_二錦衣照_二故鄉_一

さて靜夫は、北條縣十五等出仕に補せられ、美作へ赴任して、政府の方針通りに、地租改正の事業に従事せられた。翌明治六年三月には、果して暴動が起つたが、程なく慰撫鎮靜して、其の任務を完了せられた。その後續行せられた全國の地租改正は、範を美作に取つたといふことである。

かくて功績は認められ、明治九年には、擧げられて内務省九等出仕となり、地租改正事務を分掌せられた。同十年西南の役が起つた際には、その三月に出張先なる新潟縣から、至急に歸京を命ぜられ、直に鹿兒島縣一等屬に任ぜられて赴任せられた。鹿兒島縣に於ては、第三課長を勤務せられ、更に第一課長を兼務せられて、危難の間に晝夜公務に盡瘁せられた。而して九月二十四日城山の陥つた後、靜夫は能筆の故を以て、推されて西郷隆盛の墓標を書かれたさうである。役終り事全く平いで後、職を辞して東京に歸られた。

その後明治十三年五月再び内務省一等屬に任ぜられ、山林局勤務として秋田縣出張所長を命ぜられたが、翌十四年には、大藏省一等屬に轉任せられた。而して明治十六年五月には、大藏權少書記官に任ぜられ、同十九年一月には、大藏省主計局總豫算課長を命ぜられて、初めて重要なる國務の一端を

管掌せられることゝなつた。かくて明治二十三年帝國議會の開かれた時には、豫算案政府委員となつて、よく主務大臣を補けて任務を盡された。爾來年々の議會に政府委員として出られたのである。而して明治二十六年には、大藏省國債局長に昇任せられた。やがて翌明治二十七年八月には、日清戦役が起つて、九月には畏くも大本營を廣島に進められた。その時靜夫は國債局長として、鳳輦に扈從して廣島に赴いた。畏れ多くも大元帥陛下には、深く軍費に御軫念あらせられ、一日靜夫を御召出しになり、徳大寺侍從長及大藏大臣渡邊國武侍立の上、國債の情勢と戦費の關係とを詳細に御下問あらせられた。靜夫は恐懼感激措く所を知らず、微に入り細に亘りて國家財政の現状を明かに御説明申し上げ、此の上とも國債を處理し戦費を充實して、萬違算なきを期し奉るべき旨、御奉答申し上げたところ、龍顏殊に麗はしく、優渥なる御言葉を賜はつたといふことである。奥山の一農家から出た靜夫が、一天萬乗の君に咫尺して、勅問に御奉答申し上げたことは、眞に身に餘る光榮であつて、その感激は察するに餘りある次第である。然るに靜夫は、奉答終つて控室に歸や否や、机上に泣き伏してしまつたので、日野西侍從は、曾根が何か御前で失策したのではないかと、心配せられて問はれたところ、靜夫は、あまりに御座所のお粗末なのを拜見して、畏れ多く、感極まつて泣いたのであると言はれた。侍從も俱に聲を放つて泣かれ、傳へ聞くもの皆泣かないものはなかつた。時の新聞紙上には『明治の高山彦九郎』と大書して傳へられたといふことである。

かくて日清戦役も連勝の結果に終り、明治二十九年拓殖務省の設置せられた時には、大臣高島鞞之助の下に、北部局長に任ぜられ、北海道拓殖の事に盡された。而して翌明治三十年には、臺灣總督乃木希典に拔擢せられ、臺灣民政長官に任ぜられた。その際徳富蘇峰氏が『國民之友』誌上に

臺灣の非政正に一大掃蕩を要するの秋、曾根靜夫新に民政長官に任ぜらる。新長官の任も亦重し矣此際吾人は切に新長官が大々の英斷に出でんことを欲する者なり。

曾根靜夫平生反對癖あり、一事の起る必ず先づ反對抗辯以て其議論を上下す。而も之を處決するに當りて、往々其自論と副はず。彼は斯の如くして以て利害得失を究むといふ。彼は權貴に屈せず、同僚に倭らず、部下に聽かず、卓然自立唯乃公あるのみ。而も箇中の消息には、彼が汲々として其是非を判別するに苦しみつゝあるなりと、彼も亦一奇士なる哉。

と書かれたのは、當時の輿論と靜夫の性格の一面とを評し得てゐるものと思ふ。とにかく謹嚴恪勤の性格は、乃木大將と一致し、互に靈犀相通じ、肝膽相照してゐたので、誠心誠意乃木總督を輔けて臺灣統治のために盡された。然るに内閣交迭等の事情があつて、翌明治三十一年三月乃木總督の挂冠せられると同時に、靜夫も職を辞して東京に歸られた。故に遠大の抱負も、十分に實行せられることが出来なかつたのは遺憾であつた。而して同年六月山形縣知事に任ぜられたが、これまた直に辭職せられた。而して明治三十二年五月帝國議會の協賛を経て、北海道拓殖銀行法が公布せられるに及ん

で、設立委員を命ぜられ、推されて委員長となり、翌年二月同銀行の創業に際し、選ばれて取締役兼頭取に就任せられた。爾來北海道拓殖資金の充實融通に盡瘁せられた。

然るに明治三十六年の春から病に罹られ、遂に五月三十日に東京牛込の邸で歿せられた。行年五十九歳であつた。病篤きに及んで、事天聽に達し、特旨を以て正四位勳三等に叙せられた。墓は東京雜司ヶ谷の墓地にある。又分骨の墓は佐久間村奥山の先塋の次にある。靜夫には一男三女があつて、男廉郎氏は今東京に住せられ、其の長男は宮内省に奉仕せられてゐる。而して女子は皆他に嫁し、別に親戚高梨庄左衛門の二男虎之助氏を養子として分家を立てられた。虎之助氏は今館山北條町に住せられてゐる。

畠山 勇 子

畠山勇子は、鴨川町横渚よこすかの畠山治平の長女で、慶應元年昭和十年か（昭和十年か）十二月六日に生れた。母はせいんといひ、家の娘であつて、治平は北三原村山川の農鈴木家から來た養嗣子である（鈴木與三衛門の二男）。畠山家は舊家であつて、もとは紀州あたりの住人であつたのが（紀伊大和の地方は足利時代に）、徳川時代の初頃に、房州へ移住して來たものらしい。家系の詳しいことは、文献が堙滅してゐるので知りがない

が、それでも寛永三年(昭和十年から約三百年餘)以後のことは、大体に知り得るのである。とにかく土地の舊家として、資産もあり、殊に勇子の父治平の頃には、家計も裕福であつたといふことである。治平には一男一女があつて、女子は姉の勇子で、男は弟の文治郎氏(現存)である。

勇子は十歳の時に、村の小學校に入學した。それは小學校といつても、學制頒布後間もないことであるから、神藏寺といふ寺を借りて開かれたもので、前原小學校といひ、校長は福田友貞、その下に寺田重次郎と此の寺の住職藤倉某とが居つて、三人で教へてゐたのである。勇子は此の小學校に學ぶかたはら、諏訪神社の祠官堀江七郎といふ人に就いて、漢籍を學ばれた。勇子は資性顯悟にして記憶がよく、且勝氣であつたから、學校の成績は頗る優秀であつたといふ。かくて小學校の全科を卒業して後は、母を助けて家事に従ひ、裁縫その他女子の技藝などを習はれた。而して父治平は、勇子の小學校へ入學した明治七年の七月二十三日に死亡せられたので、其の後は母や祖父父母などの手に養育せられた。母は其の時代としては、相當に教育を受けられた人で、勇子の家庭教育には、よほど留意せられたといふことである。勇子の確乎(しつかり)した性格は、父祖以來の傳統的精神にもよるが、又この母の教育に負ふ所が多いこと、思はれる。

かくて勇子は、十七歳の時に、千歳村安馬谷の小林吉藏に嫁した。小林家は商業を営み、相當の資産家であつたが、吉藏には兄が二人もあり、家族も多人數であつたから、勇子の立場は、随分面倒で

あつたらしい。而して勇子は勝氣であり、且つ商業には不向きな性格を持つてゐたので、良人との間にも、夫唱婦隨といふわけには行かなかつたらしいのである。且又勇子は、子供の時から讀書を好み、『八犬傳』や『釋迦八相倭文庫』などを耽讀し、殊に政治小説を好み、政治上の論說なども愛讀し、新聞も『日本』などの堅實なものを讀んでゐたといふことであるから、此の点に於ても、普通の商家の主婦としては、周囲との折合がうまく行かなかつたであらうと思ふ。それやこれやの事情があつたと見え、遂に不縁になつて、明治二十年二十三歳の時に、實家へ歸へられた。

それから勇子は、再嫁の心なく、東京に出て、萬里小路伯爵家(通房)の女中となり、其の後高輪の原六郎(當時正金銀行頭取)方に轉じ、明治二十三年三月からは、日本橋區室町の魚商白鳥武兵衛方に雇はれてゐた。明治二十四年五月大津事件の起つた時には、此の家に居たのである。

勇子は、沈着にして寡言のたちで、普通の女性のやうに、細事にくよくよするやうな風はなかつた。眞面目であつて、當世風の輕薄な風習を嫌つてゐた。さればとて舉動粗野でなく、品位をそなへ忠實に主家に仕へてゐたのである。勇子はよく折にふれて歌を詠んだ。或時鏡の袋に

日々ひびに清めて鏡うつし見よ貞操邪正その容貌みえにあり

と書いた。また繪を書くことも巧みで、小林家に嫁してゐた時のこと、寢衣の裾に菖蒲の繪を描いて、背の方には南無妙法蓮華經と書いて着たといふことである。また敬神の念篤く、鏡のへりに天照

皇大神宮と書いて置いたといふことで、とにかく普通の婦女子ではなかつた。勇子の持つてゐた雄々しい精神は、畠山家に通じて流れてゐる精神らしい。勇子の伯父にあたる榎本六兵衛は(母せん)東京の豪商であつたが、氣宇豪壯果斷にして頗る義俠心に富み、明治の初め新政府へ二萬兩を献じ、其の他にも政府のために多大の犠牲を拂つた人である。勇子は此の伯父に信賴してゐたので、氣質に於いても似通つたところが多かつた。勇子が離縁後上京して、奉公した時も、勿論此の伯父の世話であつた。

さても勇子は、非凡の性格をそなへながら、他家奉公の身となつて、實直に働いてゐたところ、突如として明治二十四年五月十一日に、大津事件が起つて、勇子は日本帝國の憂ひを一身に引受けて、悲壯の最後を遂げるに至つた。時は西曆千八百九十年(明治二)露國皇太子ニコラス親王殿下(二十)は、露都を出發あらせられ、希臘の國を訪うて、同國の皇子ゲオルギオス親王殿下(三)を同伴して、海路から東洋へ向はれ、印度シヤム支那を経て、日本に來遊あらせられた。而して長崎へ御到着になつたのは、明治二十四年四月二十七日であつた。我が國では國賓の大禮を以て待遇し、有栖川宮威仁親王殿下を接伴委員長として、以下多數の接伴掛を任命して、十分に御歓待申し上げることゝなつた。皇太子殿下の一行は、長崎鹿兒島のあたりを巡遊せられて、五月九日に京都に御到着、旅館常磐に入らせられた。而して十日十一日の両日は、京都の名勝を遊覽あらせられ、明くれば五月十一日。此の日こ

そは大事件の起つた日である。この日は、大津から琵琶湖上にかけての名勝を御遊覽になることゝなつて、皇太子殿下を始め隨員接伴員等の一同は、人力車を運んで大津町(今の大)津市(津市)に向はれた。而して三井寺唐崎等を御覽になつて、滋賀縣廳にて御晝食、午後一時三十分縣廳を御出發になつて、京都へ御歸館の途につかれた。然るにまだ大津の街を出はなれられないうちに、突然警衛巡查の津田三藏は拔劍して、皇太子殿下の御頭部に二太刀斬りつけた。車夫向畑治三郎は、三藏の両足をとらへて引倒し、他の車夫北ヶ市市太郎は、其の劍を奪ひ取つたので、駈けつけた警官は難なく三藏を捕縛した。皇太子殿下の傷は、幸に浅かつたので、應急手當を受けて後、汽車で直に京都へ御歸りになつた。事は直に電報を以て内閣に報告せられ、威仁親王殿下からは特に 天皇陛下へ電報を以て奏上せられた。内閣諸大臣を始め朝野の驚愕心痛一方ならず、畏くも 天皇陛下には、翌十二日親しく御見舞のため、土方宮内大臣を隨へさせられて、京都まで行幸あらせられ、十三日には皇太子殿下の御旅館に臨幸あらせられ、御對面の上、渥く御慰問あらせられ、追つて御健康舊に復せられたる後は、豫定通り御遊覽を了へさせられるやう御勧めになつた。皇太子殿下も非常に感激あらせられたが、本國の母后からの電報もあつたので、とにかく神戸碇泊の軍艦に御引取りのことゝなつた。その時も 陛下は神戸まで御見送りあそばされた。かくまでに上下舉つて御引留め申したに拘はらず、皇太子殿下の一行は、十九日に神戸を抜錨して歸國の途につかせられることゝなつた。此の間に於ける我が國上下

の憂慮は一方ならぬものであつた。

此時勇子は、日々の新聞を見たり、うはさを聞きながら、深く事件の成り行きを心痛し、殊に一天萬乗の大君がいたく宸襟を悩ましたまふことを拜察し奉り、何とかして國交を圓滿にをさめ叡慮を安んじ奉る道はないものかと、日夜焦心苦慮してゐた。而して主人や朋輩にも話しかけて見たが、偏人がいらぬ心配を始めたといふくらゐで、相手にせられなかつた。ところが十七日の新聞には、皇太子殿下旅行中止御歸國と定められた旨を報じた。そこで勇子は奮然起つて、一身を擲ち、御引留め申さうと決心して、十八日の夜やうやく主人の許しを得て暇をもらひ、下谷茅町二丁目六番地に住んでゐた伯父の榎本六兵衛を訪ふて、何とか伯父の力を借りて國難を救ふことが出来ないかと相談した。然るに伯父は頻りに断念するやうに勧められたので、勇子は其のまゝ伯父の家に一泊して、夜中ひそかに數通の書置を認めた。そして京都へ行つて、此の書置を並べて自殺しようと思つたのである。

かくて十九日の朝、勇子は伯父の家を辞して、下谷の或床屋で剃刀を研がせ、又質屋へ衣類を質入れて旅費をこしらへ、一散に人力車で駈けつけ、新橋驛から西行の列車に乗つて、翌二十日午前京都へ着いた。京都へ着いて見ると、露國皇太子は、既に昨十九日に神戸を御出發になつた後であつたから、非常に残念に思つたが、併しまだ畏くも、陛下には御駐轡中であらせられ(二十一日御出發)要路の人も多く滞在せられてゐるので、かねて覺悟の通りに決行したならば、御取り上げになることゝ信じてゐた。そこで晝間は人に妨げられる虞れがあるから、日の暮れるまで人力車を驅つて、寺々を巡拜し、知恩院では暫く説教を聽いてゐた。而して

けふまるるちなみも深き知恩寺のけしきのよきに憂きぞ忘るゝ

といふ歌を詠んで、殿司の僧に見せなごした。かくて日も漸く暮れかけたので、再び人力車に乗つて京都府廳へと向つた。府廳に着いて勇子は、門衛に一通の書を出して取次ぎを請うたが、拒絶せられたので、勇子は車夫を返し、ひとり府廳門前にたゞすんでゐた。そして其のあたりに人影の絶えるのを見定め、白布を地上に敷いて、十通の書置を前に並べ、細帯を以て膝を縛し、かの下谷で研がせた剃刀をもつて腹を切り、咽喉を突いた。苦悶の聲に門衛や附近の人々が走り寄つて、誰か『發狂か』といったのを、勇子は聞きつけて、首を左右に振り、頻りに上の方を指さした。その意味は何であつたか判らない。やがて醫師が来て手當を加へたが、出血の多かつた爲に其の效なく、後ろに倒れて瞑目した。時に明治二十四年五月二十日、享年僅に二十七歳であつた。書置によつて身元も直に知れ、檢視も簡単に済んで、遺骸は廳吏員の世話で末慶寺(京都市下京區松原)に葬られた。法名は義勇院頼室妙顯大師といふ。京都の有志者は、深く勇子の志に感じて、盛大なる法會を営まれた。勇子には子がなく、一人の實弟文治郎氏(今の名)は現に東京に住せられてゐる。

書置は十通あつたが、今その中の一二を左に掲げて一斑を示すことゝする。

(一)

露國皇太子^{すこし}毫にても不便に思召され候はゞ是より御入京被爲遊ゆるく御養生遊ばされ候はゞ小女國人の身に取り忝く奉存候 敬白

明治二十四年五月十八日

千葉縣長狹郡前原鴨川町

畠山文治郎 姉

勇子

露國御官吏様

(二)

露國皇太子我御國より御出航前西京迄參上致度思ひ支度致し主人に暇を乞ひ候に残念なる哉突然の事故暇給はらず爲に時間を費しやうく新橋停車場迄車を早めて參り候處はや九時にも近き頃に相成候間如何に心あせる共今日の間合はざれば此所に落膽致候も萬一御間に合はゞやと悲敷も後發の汽車に乗じてつくく思ひ見るに此行ひは魯國の爲に盡すにて之れ帝國の御爲と我と自ら氣を取直し此の始末に及候間此上は小女の辛勞御察被下上封じ之書面御取上被下給はゞ辱く小

女一念何卒御取上の程偏に奉希上候 敬白

千葉縣長狹郡前原鴨川町

畠山文治郎 姉

勇子

日本政府様 御取上を乞

安房先賢偉人略傳 終

安房先賢偉人顯彰趣意書

茲に 不肖等 發起人一同微力を願す、敢て安房先賢偉人の顯彰事業を計畫致しましたに就て、其の趣旨の概要を申述べ、大方諸賢の御賛同を仰ぎたいと存じます。抑々此の事の發端は、昨年の秋安房同人會の一二の者が出京の折、偶水戸學研究の權威峰間鹿水氏から房州出身の偉人石井收（通稱彌五兵衛）先生のお話を承つて、始めて此の偉人のあつた事を知つた事が最初の動機になつたのであります。收先生の如きは、絶代の名諸侯水戸義公が房州に駕を枉げて其の廬を過ぎり、わざわざ招聘して、大日本史の編纂にまでも與からしめたといふ大學者であるにも拘はらず、我々房州の者が殆ど全く今日まで知らずに居つたといふことは、誠にお恥しい次第であると痛感したのであります。是の如き状態では、尙此の他にも隠れた大人物があるかも知れず、又既に知られてゐる人物にしても、將來埋没し了らぬとも限りませぬ。故に此の機會に、廣く之を調査して之を顯彰し、之を永遠に傳へ、以て一は我が房州の誇りとなし、一は郷

士教育の資料に充て、風教の一助となすは、今日の急務であらうと固く信ずるのであります。惟ふに、方今の世相は人心日に浮薄に流れ、利己になり、名利に趨り、道義は頽廢して、洵に寒心に堪へぬものがあります。此の時弊を匡救するには、其の方策多々あるべきも、我が郷土としては、先づ何よりも愛郷の念を高調し、其の土地に於ける先賢偉人の事蹟を明確に認識せしめ、之に私淑し、之に矜式し、之に薰化せしめることが、最も捷徑にして適切なる一方法であります。否斯の如きは、一時の匡弊策に止まらずして、永遠に地方の風教を維持し、將來第二の聖賢偉人を出す契機ともなるものと信ずるのであります。是れ今回不肖等が微力をも顧ず、敢て此の事業を企圖して諸賢の御賛同を請ふに至つた所以であります。事業計畫の概要は、別項に記載する通りでありますから、篤と御瀏覽の上、趣旨のある所を諒とせられ、奮て御援助あらんことを幾重にも悃願して止まざる次第であります。

昭和十年六月

發起人總代

稻村眞里

賛助員

(順序御免)

子爵	稻葉正弘	子爵	本多正震
貴族院議員法學博士	鷗澤總明	衆議院議員	本多貞二郎
衆議院議員	今井健彦	同	鷗澤宇八
同	岩瀬亮	同	多田滿長
同	川嶋正次郎	同	小高長三郎
同	鳩山秀夫	醫學博士	入澤達吉
千葉醫學大學博士	高橋信美	千葉醫學大學前學士	松本高三郎
醫學博士	伊東彌惠治	同藥學專門部主事	間庭秀夫
醫學博士	横堀治三郎	千葉師範學校長	根岸福彌
千葉女子師範學校長	高橋勝一	商科大學教授	峯間信吉
前知事	三浦實生	千葉合同銀行頭取	古莊四郎彦
千葉貯蓄銀行專務	三木徳三	千葉圖書館司書	本橋清
成東中學校長	中山音彌	千葉高等女學校長	豊澤藤一郎

683
12

主 基 村 長	西 條 村 長	曾 呂 村 長	南 三 原 村 長	丸 村 長	千 歲 村 長	健 田 村 長	館 野 村 長	長 尾 村 長	神 戶 村 長	白 濱 町 長	和 田 町 長	鴨 川 町 長	小 湊 町 長	勝 山 町 長
川 名 傳	尾 澤 建 一 郎	吉 田 熊 吉 郎	戶 田 榮 吉 郎	吉 野 民 造	神 崎 吉 藏	立 川 半 平	渡 邊 巖	八 角 六 一 郎	早 川 六 郎	早 川 敬 治 郎	吉 川 義 太 郎	榎 本 敏 太 郎	小 澤 寅 吉	那 須 峯 吉
吉 尾 村 長	田 原 村 長	東 條 村 長	太 海 村 長	北 三 原 村 長	豐 田 村 長	七 浦 村 長	九 重 村 長	豐 房 村 長	富 崎 村 長	西 岬 村 長	千 倉 町 長	江 見 町 長	天 津 町 長	保 田 町 長
早 川 貞 藏	鈴 木 信 道	戶 坂 清 治	大 湯 喜 平 治	伊 豆 萬 治 郎	吉 田 淵	栗 原 剛	秋 山 邦 美	鈴 木 朝 次 郎	神 田 眞 吉	山 崎 又 吉	小 西 鍋 吉	川 名 龜 博	武 津 爲 世	關 口 二 郎

富 浦 町 長	那 古 町 長	同 神 職 會 長	同 教 育 會 長	同 女 子 青 年 團 長	同 水 產 會 長	同 郡 農 會 長	安 房 郡 醫 師 會 長	房 總 日 報 社	同 押 元 才 司	縣 會 議 員	衆 議 院 議 員
小 林 龜 太 郎	金 木 又 市	稻 村 眞 里	佐 久 間 喜 平	倍 賞 義 雄	小 谷 仲 次 郎	鳥 海 孝 太 郎	高 木 勇 次 郎	同 社	同 司	竹 澤 太 一	青 木 泰 助
岩 井 町 長	船 形 町 長	館 山 北 條 町 長	同 町 村 長 會 長	同 齒 科 醫 師 會 長	同 聯 合 青 年 團 長	同 畜 產 組 合 長	同 在 鄉 軍 人 聯 合 分 會 長	日 刊 房	同 房	縣 會 議 員	高 瀧 政 吉
椎 津 宗	江 澤 賢 治	石 崎 常 夫	早 川 敬 治 郎	林 懿 德	佐 藤 直 右	笹 子 藤 太	山 口 唯 次 郎	同 社	小 柴 金 一 郎	小 谷 三 之 助	同 助

發起人

(順序御免)

683
123

全 全 全 全 東

【有志發起人】

川崎七郎 早川雪洲 青木彬二 山口德三 福原信三

全 全 全 全 東

小澤隆八 川名克雄 石井清治 島田芳治 池田清秋

【安房郡神職會】

伊藤斌夫 野原肇 小澤佐助 佐久間熊治 稻村真里 小澤恭治 岩本幾雄 岡野哲三

山田教宇 原瀨為次 鈴木信道 山口誠一 堀口八十治 三幣清之 川名雄次郎 秋山幸壽

醫學博士 醫學博士 醫學博士 醫學博士 醫學博士

【安房郡醫師會】

山口唯次郎 齋藤喜市 岡本哲郎 登倉源吾 川名正義 龜田俊雄 龜田雄 角田博明 穂坂與

醫學博士 醫學博士 醫學博士 醫學博士

原進一 上野幹太郎 小谷無違 橋本平二 川名博夫 和田正系 鈴木木紀 登倉達雄 橋本鐘爾

青瀧 佐久 吉田 田原

我全 田全 石井新治 渡邊精治 高橋謹治 保泉作治 高橋福松

稻八平大主

座間喜一郎 鶉田英爾 忍足操 池田孝四郎 松崎海一

683
123

顯彰事業の内容

- 一、紀念碑
- 二、傳記出版
- 三、祭典
- 四、遺族招待
- 五、記念講演

佐藤茂三郎
水島吉藏
福原周平
高幣留吉
川名貞治郎
松川清
稻村眞里

小澤哲夫
漢人幸政
安川文時
曾根虎之助
佐野房
四宮市藏
奥澤福太郎

- 六、遺墨遺品展覽
- 七、先賢遺著全集出版(追加)

經費豫算

金五千五百圓也
 内譯
 金二千二百圓也
 金三千圓也
 金五百圓也
 金八百圓也

建碑
 傳記及全集編纂出版費
 祭典接待講演展覽會
 庶務雜費

理事 (五十音順以下全)

石崎常夫
大野太平
稻村眞里
奥澤福太郎

683
123

庶務委員

主任 奧澤福太郎
木村松治郎
四宮市藏
松川清
川名貞治郎
佐野房郎
細谷祐吾
三上信太郎

昭和十年十月十四日印刷
昭和十年十月十六日發行

非賣品

著作者

千葉縣安房郡館山北條町北條千八百八番地
安房先賢偉人傳記編纂委員

發行所

千葉縣安房郡館山北條町北條千八百八番地
安房同人會

印刷者

千葉縣安房郡館山北條町北條千六百拾番地
渡邊德太郎

印刷所

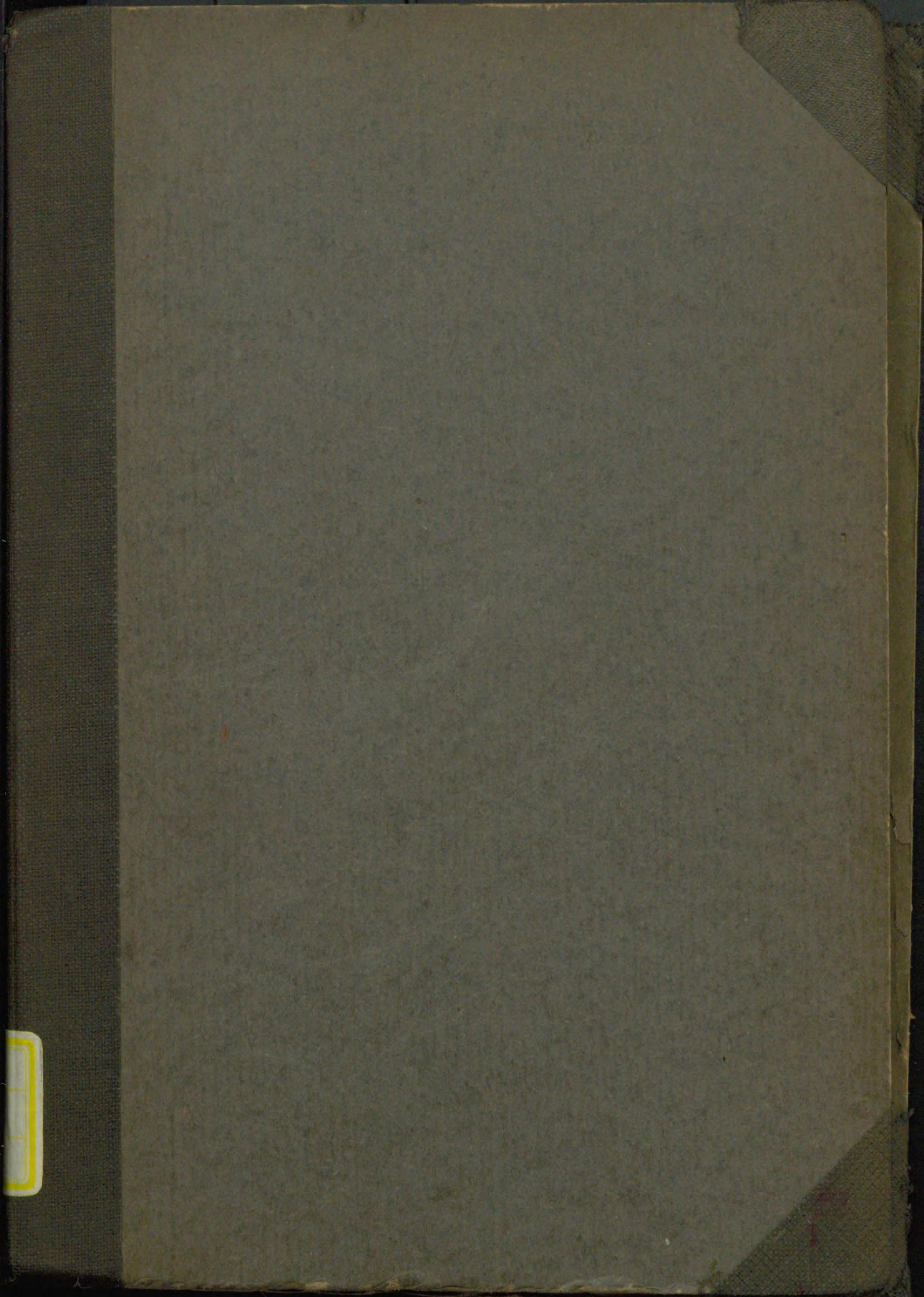
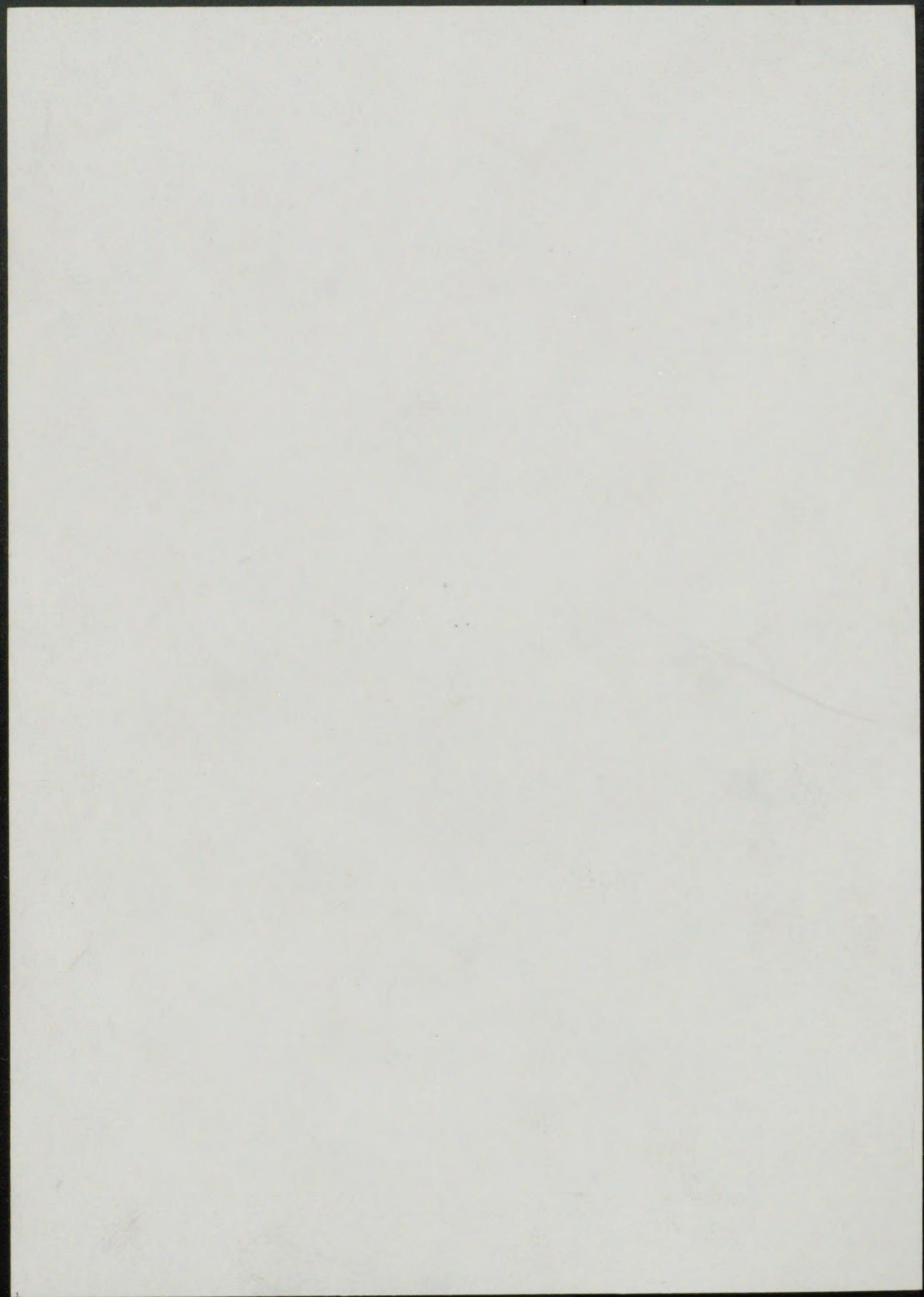
千葉縣安房郡館山北條町北條千六百拾番地
株式會社集贊舍

683
123

Table with 4 columns and 4 rows of faint text.

第一	第二	第三	第四
第一	第二	第三	第四
第一	第二	第三	第四
第一	第二	第三	第四

683
123

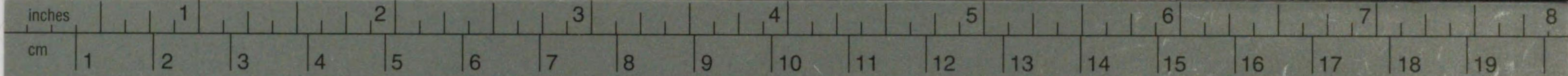


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

